

敵を搜索します、終りツ」道に、元ちゃんは志願兵だけあつて復誦の要領が却々好いや「宜しい」「元ちゃん此方を向いたね、元ちゃん率三名の中へ乃公を入れて呉れるだらうね、此の通り横目を使つて居るんぢやないか、恁麼日に斥候にでも出なけりや樂する日はありやしない。

「吉田ツ」「はッ」「鈴木ツ」「はッ」をや〜乃公は駄目知らず、小山さん玉村は此所に居ますよ、連れて行つて下さいつたら！

「玉村ツ」「はッ」占めたツ、占め々々、小山志願兵は道に偉い、平時も仲の好いお影だ。

「彈丸を込めツ」と元ちゃん濟ましたものだ。小山斥候は諏訪の森

方面の敵を搜索す、銃を上げたたら前進ツ下げたら停止ツ離々になつた場合には××に集合すべし」と來た。

「前へツ」と任務、記號集合所を示し號令を掛ける元ちゃんも道に嬉しさう、怎うだい、他の奴等の羨ましさうな顔つたら無いね。隊から見える間は眞面目々々々、一番芝居を行つて遣れ、小腰を屈めて敵に見付らないやうな形とムい、斥候には此の恰好が付きものだ。でも小山志願兵も苦勞人だ、斥候と言へば吉田と鈴木と乃公の三人が毎時も卒三名だから面白いや……吉田は柳橋の△△樓の伴、鈴木は△△△と云ふ待合のドラ息子、乃公と三人寄れば三業組合が出来上るんだ。

「おい、既う大丈夫だ、玉さん何時まで斥候を爲るんだい？」は、
 小山さん、怎うも有難う、でも小山さん今日私わたしは置いてけ堀ほりか
 と思つて落膽がっかりして居たんですよ」爾さうかい……でも君きみの顔かほが見みえな
 かつたから」私わたしは一生懸命しやうけんめい横目よこめで秋渡あきわたりを送おくつて居たんですが」は
 、、時に今日けふは何所どこへ行かう、又例またれいの菓子屋かしやか？」宜よろござんすね
 ……小山さん、お立替たてかへを願ねがひますせ」あ、宜よろいとも、餡あんバン位ぐらゐ」

乃公達兵隊をれたらへいたいはつまらない、家うちから切角小遣せつかくこづかいを持もつて來たつて酒保しゆほ
 日ひか外ぐわい出しゆつの時ときでなければ、賽布さいふは班長はんちやうにお預あづかりだ、怎麼時なんなときのお役やく
 には立たない、志願兵しけんべいは既う伍長ごちやうだ、勢いきほひ立替たてかへて貰もらはなければな

らない、小山志願兵こやましがけんべいには何時いつも馳走をこられるばかり、後あとでお立替たてかを返かへ
 したつて受け取とらない、本到ほんたうに氣きの毒どくだ、菓子屋かしやは今乃公いまをの部隊ぶたいが
 通過とほつた所ところだ、廻まわり道みちを爲して後戻あともとり、諏訪すわの森もりの斥候せつこうが、部隊ぶたいの背う
 後しろへ廻まわつて御菓子おかしを喰たべて、お茶ちやを飲のんで、煙草たばこを喫すつて、晝寝ひるねを
 爲して居ゐりや世話せわはないや。

此家こゝは戸山とやまの原はらの入口いりぐち、演習えんしゆの兵隊將校へいたいしやうかうを對手あひてに菓子かしや辨當べんたうが商
 賣ばい、迂濶うっかりすると將校しやうかうが晝飯ひるめしを食くひに來きたりするから危あぶない、菓子屋かしや
 の娘むすめのお艶つやサンは來くる毎たびに別嬪べっぴんになるが、擲かたか擲かたかうのを眞まに受うけて、
 誘さそふ水みづあらばの素振そぶりが嫌味いひみだ、吉田よしだの野郎奴やろうめ、嫌いやに氣きがあると見
 える、馬鹿ばかに仲なかが好よい、

「お艶さん、何時見ても綺麗だね」

「有難うございます、何か馳走りませうか」

「申談ぢやない、冷笑すんぢやないよ、私に言はせりや、此の儘に

は爲て置かないんだが、二等卒の兵隊さんぢや仕様がないからね」

「本到に軍隊のお務めばかりは子」とお艶さん嫌に同情する。

「それに貴郎なんかお家がお樂なんださうですから」と愈吉田の

野郎を圖に乗せる。

「樂だか、怎うだか知らないが……誰がそんな事を言つたい？」

「誰にたつて、そりや聞きまさアね……それに大概御様仔でも知れ

ますから」

「をやく私はそんなに御様仔が好いかね？」

「えい、それは矢張り氏より育ちつて言ひますから」

お世辭とは知りながら、吉田の奴め鼻をピコ付かせやがる、その

詰局が小山志願兵に内密で五十錢借りやがつて歸りに「些のお茶代

だよ」だつて、ウフ笑はせやがる。

「そろく行かうせ」が二時間も遊んだ後、部隊は既う大分前進し

て終つて、戸山射撃場の裏手へ来て居やがる、小山志願兵、道に困

つたと云ふ顔構、「志願兵殿、何と言つて報告します？」、「さアそれ

を今考へてる所だが、弱つたな、關うもんか、何とか口から出任せ

に、遣つ付けるから君達笑つちや不可ないせ」

怎うなると乃公達も心配だ、當の責任者ぢやないが、志願兵がトデを踏めで乃公達も共某だからな——

「小山斥候報告ッ小山志願兵は部下三名を率ひ諏訪の森方面の敵を搜索し只今歸りましたッ敵の前衛部隊約一個中隊諏訪の森の東方約百米突の地點に散開して居りました、歸路大窪方面にて敵の將校斥候を衝突し、止を得ず戸塚村方面へ退却し落合村を迂廻して歸隊致しました、敵の將校斥候は戸塚村より引返し、前衛部隊は漸時恩田村方面に向け退却しつゝある模様であります、報告終りッ」と來た、小山志願兵口から出任せを滔々と誠しやかに勇壯に痛快に報告に及んだ、其の態度、口調は道に立派だ、小松少尉は變な薄笑ひを爲な

がら「宜しいッ」と來た、これで小山さんも乃公達も息と安心、勿論小松少尉だつて最初から、敵も何も居ない所へ斥候に出すのだから、唯其の出發動作と報告動作とが好ければ、夫れで宜い譯だ、報告の内容は勿論報告者の隨意、謂はゞ自分勝手な拵へ文句で好い譯だ、乃で長い時間を費した爲めには、戸塚村まで退却したと云へば言譯は立つ譯だ、小山志願兵は道に巧い事を言つたもんだ、若しあんなに遊んで居ながら諏訪森だけの報告だつたら「長い間何を爲し居た？」位は確手言はれるに相違ない、は、大笑ひだね、乃公なんか人間が正直だから、乃公が報告するとなれば「玉村二等卒は卒二名志願兵一名と共に諏訪の森方面の敵を搜索する態を爲て、本部隊か

ら見えない射撃場横の土手裏を迂廻して戸山の菓子屋と襲撃し、館
パン大福に攻撃を加へました、部下の吉田二等卒は敵將お艶サンを
生捕にせんと大いに策戦し、最後に五十錢の爆弾を投下しました、多
分近日中には捕虜となる豫定であります、報告終りッ」と言ふ所だ
がなア——

兎に角、志願兵の御供で斥候は嬉しい、實に志願兵なればこそだ。
出来合の下士は眞平、眞平だ。

不寝番

——可愛い兒は兵隊に遣れ——

其の晩、私是不寝番である、中隊の兵隊が二人宛一班から五班ま
で順に一時間交代で二階へ一人、階下へ一人と寝ずの番を爲る、新
兵は不馴れとあつて二月の末までは爲すに濟むが三月の聲を聞くと
古兵と同じく三十日目は此の役廻りが廻つて来るが、偕ても不寝
番の辛い事、殊に新兵と来た日には交代でお代りの古兵を起しに行
つても却々起きては呉れず、と云つて無暗に起せば文句が五月蠅い
し、起さなければ、何故起さなかつたで又文句があるし……抑も内
務班の寝台の順は古兵の次へ新兵其の次へ古兵又其の次へ新兵と新
古入が違ひになつて居るので此の不寝番は交代となると新兵は嫌が
應でも古兵を起さなければならぬ、それで此の新兵が夜の夜中に

古兵を起す氣兼、氣苦勞は容易なものではない、僅か警へ同級同任の者と云へど新任の者は舊任の者には従ふものよ」とあるばかりに、同じヱツ星の二等卒同士でも古兵となれば一枚役が上だ、之れが軍隊が保つ所以であるから仕方がない……

「玉村ッおい〜不寝番だ」

「はい、はい、むにや〜」

「むにや〜ぢやない、不寝番だ」

「はい、起きます、只今ッ」

其の一日練兵の追廻しに疲れ切つた躰軀だから堪らない、其の上、「状袋」は恰度好い加減に躰の温みでボカ〜して居る所、三月とは

云へ未だ寒い初旬の、時も夜中の一時から二時まで……あゝ借々辛いな……と思つたわけでは濟まないのだから仕様がな、軍服着込んで、階下の石廊下へ來ると入り代りに古兵の鶴田は班へ歸つて床へ潜り込んで終つた。――

寒い風が吹き通す石廊下へ爲す事もなしに只一人での寝ずの番、寢氣は未だ醒め切らぬに寒風が横面を張つて通ると思はず「はッハクシヨン」で廿一男が水漬を啜り上げる、電燈が薄ぼんやり光るばかり、思ひは同じだが二階の不寝番は、廊下だから階下よりは風が通らないだけに寒くはあるまい……と少しでも樂の爲たさに二階が羨ましくもある、遠で犬の遠吠する外は、道が晝間は出入の激しい

此の入口も、物音一つ聞えず、天地は寂として静まりかへる、石廊下に突立つた儘、腕組みして仄然と、自分ながら物あはれである、家にお袋でも此の姿を見たら何と云ふたらう「此の寒いのに、何を爲て居るんだい、そんな所へ、早くお寝な」位は云ふに決て居る、先達の日曜にもお袋が「お前が只一人ぼんやり、變に微暗い所へ突立つて考へ込んで居る夢を見たので一日氣持ち悪く、妙な事でもありや爲ないかと思つてと……」と私の無事な顔を見た時に涙を流さんばかりに喜んだが思へば怎うした私の恰好を夢に見たんだらう！一態は暢氣なお袋だった私が兵隊に出てからは馬鹿に苦勞性になつたやうだ、あんなちや私が戦争にでも行くと云つたら狂者になる

かも知れない、軍隊から云つたらあんな不忠なお袋はありや爲ないが、恚う見えても一人息子の乃公が怎麼に可愛いのだか知れやしない、あゝ乃公はもう親不孝は爲まい安心させるが何よりだ……と追に家が戀しくなれば親を思ふ、可愛い兒には旅をさせろより可愛い兒は兵隊に遣れた、自駄樂な、のらくら男も軍規でふ手桎足梏と軍律でふ鑄型で締め付けて嫌が應でも規律の二字を教え込む、憂くも辛くも軍隊では軍規軍律は其の儘に兵は兵、士は士で一切平等に、譬へそれが在郷の田吾作でも、お金持の若旦那でも廻つた勤めは爲にやならぬ、其所に確固不動の大精神、軍人精神が養はれる、——森々と更行く夜の營内に恚うした不寝番の一兵卒が、寒さに顫へ

ながら憊うした事を考へつゝある事を誰が知ちう！誰知らずとも私は知つて居る、私自身が軍隊の對する目が醒めての私の自覚だ！寢むくとも寒くとも辛くはない、辛くないのが軍人の精神だ、あゝ私は陛下の貔貅、國家の干城だ、不寝番これも國家に對する私の勤め、陛下に對して臣玉村の赤心だ……

偶と氣の付いた二時の時計……もう役済みか、今日 お務めは馬鹿に樂だつた、之れも軍人精神を自覺したお蔭か……と、之れから班へ交代を起しに行かうとすると二階から登音が段々近付く様仔、見れば新兵係の加藤少尉殿が便所へ行く所らしい、私の顔を見ると一緒に私は勇ましく舉手をするると加藤少尉、軽く頭を下げ通つて

終う、私は少尉が室へ戻るまで其所に居たが、少尉が再び私の前を通つて室の方へ戻ると一緒に班へ歸つて交代に古兵の田村を起した「うゝ直ぐ行く」と立派に返事を爲たので、私は直ぐに元の位置に戻つて田村が仕度を爲て交代に来るのを待つて居た。

五分……十分待つたが田村は來ない、十五分まで我慢したが未だ來ない、私は又も班へ歸つて田村を起した、田村は私に起されたが寢て居た、私が揺り起すと「直ぐ行く……仕度する間待つて、呉れ」と云ふ仕方なしに私は又も元の位置へ歸つたが二十分過ぎ、二十五分を過ぎたが未だ來ない、追に私は呆れた、何て圖々敷い奴だらう、彼人は軍人精神のない奴だ……と今始めて覺つた軍人精神は鑑

みるに田村の來ないのは軍人精神に缺けて居るからた、あんな奴は……と座立たしくもなる、念の爲めもう一度起して起きなかつたら宜し、彼奴の分まで乃公が行つてやると私は三度彼を起しに行つた、然し彼の返事は前と同じだつた、私は三度元の位置に立つた、三十分過ぎたが彼は出て來ない……三十五分経つても來ない、「宜矣 恚うなりや乃公はもう起さないツ」と私は意地になつて嚴然として立つて居た……と二階から人の聲音して來た「奴め到來やがつたなと」思つたのは間違ひで、先刻使所へ行つた加藤少尉、腹刺しても爲て居るのか又もや階段を下りて來た、そして私の敬禮するのを見ると、

「おい、御前は二時に交代ぢやなかつたのか？」と道に新兵係だけあつて氣は付けて居るらしい、併し私が此所で交代だつたが古兵の田村が未だ來ない事を言へば、それこそ田村の奴は大變だ、此所一番仇を報ゆるに恩を以てしてやれと思つたのか、それとも後で田村の崇りが恐いと思つたのか突差の間で自分ながら解らなかつたが、「はい、いゝえ」と曖昧に言ふのを聞いて加藤少尉は其の儘使所へ行つて終つたが、運が悪い時は運の悪いもので、加藤少尉が便所の方へ行つてから程経つて田村の奴めヒョッコリ、眼を擦り擦り交代に來た、併も、私が田村に加藤少尉が今使所へ行つたから、今直ぐ交代すると少尉の手前具合が悪いぞと云はうと思つて居ると、既う

少尉は二人の面前へ現はれ出た、加人に田村の奴め加藤少尉が後から来るのも知らずに道に氣がとがめたと見えて「玉村、悪かつた悪かつた、早く来るつもりだつたが遂寢むかつたものでなア、三度起されたけがなア」

と自分から悪い事を少尉に聞かして終つた。と少尉は黙つて居ない「お前は田村だな」と突然背後から聲を掛けられた田村の驚きやうつたらない。

「はッ」と敬禮した時はもう遅い。

「お前は初年兵にばかり不寢番を爲せて置いて宜いのか？」
「はいッ」と田村はたゞ鯨鉾張つて居る。

「玉村、御前も好く起るまで起さなければ不可ない」と加藤少尉は言つた儘室へ戻つて終つた。田村は私に「少尉殿が來たんなら來たと早く言や好いのに」と言ふ「でも言はうと爲て居る間に貴君が、自分であんな事を言ふんですもの」と云へば「まア好いや、明日班長に油を取れるんだ」と田村は言つて居た、私は其の儘班へ歸つて寢た、其の翌日果せる哉、加藤少尉から班長へ注意があつて田村は班長に呼ばれて三十分間ばかり蘭引に掛けられた、それに班の上等兵も呼ばれて不寢番の交代には上等兵が充分に注意しなければ不可んと上等兵まで聊かならぬ飛尻があつたので、上等兵も田村に入ツ當り、私は何だか自分の事から持ち上つた事件のやうに氣持ちの悪いこ

と、田村は私の顔を恨めしうに眺めて居た。

二一〇

干場當番

——小人閑居して不善を爲すですが——

班長殿に、玉村お前體が悪けりや明日は干場當番だ、干場當番なら出来るだらう、日向ぼつこを爲ながら干物の番人さへして居れば好いんだからと云はれて、今日は朝から干物番有難い次第である、併し考へて見れば妙な話、軍隊の物干には番人が居ないと窺まれる憂いがあるとは、歎かほしい次第ぢやあるまいか、其の歎はしい次第のお蔭様で私が恚うして一日樂に暮せる譯とは之れも又呀な事柄

ぢやない。それは偕て置いて嫌いと云ふ譯ではなかつたが口數の少ない、しんねり無口な班長殿は何だか恐かなかつたが、先達の日曜に家へ遊びに連れて來てから馬鹿に好きになつちやつた。又親切にも爲て呉れるやうにもなつた、あんな無口な人でも家へ來て抱妓なんかを對手に一口飲ると却々隅には置けない。

陽氣な事を云つて妓小供を笑はせて居たつけが奴も却々苦勞人だ………其のお蔭が此の干場當番である。

午前九時、戦友が練兵に出ると一緒に私は干場へ上る、營庭の櫻に霞を罩めて世は花盛り、春の日射は干場へ麗かな光を送る、襦衣や洋袴下や靴下が一面に掛け連ねてある高い干場の上、誰も居ない。

日向ぼつこの獨りぼつちである。若い私の身内はうづ／＼して顔は赫々と火照り出すと、何んでも關はない力一杯抱き締めて見たいやうな氣にもなる、遠く營庭から徒手体操の一二と街の電車の響が微かに聞えて來ると兵營の堤下を通る館屋のチャルメラの音が唄るさうに「坊やは好い兒だ眠しな」を吹いて居る。

仄然と坐り込んで居る私の腦裏には色々な事が、それから夫れと浮んで來る……阿母さんは今頃何を爲て居るだらう、抱妓の誰彼さては去年の暮までの駄々羅な様子から今の軍隊生活、後除隊までは幾月だと考へて來ると居ても立つても堪らない、干場の上を彼方へ行つたり此方へ來たり、氣を紛らしに動物園の虎のやうに運動する、

家に居た時は朝と晝の間は二時間か三時間と思つて居たのが、今では其の間の長い事つたらない。……何の氣なしに懷囊へ手を入れると昨晩買った堅パンの袋の新聞紙だ、開いて見ると毛生液の廣告が半分、髯を生くした別嬪が真中から切られて居る、日向ぼつこの所在なさに別嬪の半面を至細に點檢に及ぶと、誰か書いたか繪は却々巧いが、大体、人を馬鹿にした話だ、如何程毛生液の功能だった、恁麼別嬪に口髯が生えて堪るもんか、よし又實際生えるところで、此の藥を鼻の下へ塗るには先づ此の藥を指の先へ付けて、そして鼻の下へ塗り付けるのだらう、そんなら鼻の下だつて肉體の一部なら指先だつて肉體の一部だから差當り指の先へだつて毛が生えなければ

ばならない筈だ、馬鹿々々しい、指先へ毛が生えたら歯磨楊子は不要ない、指先の毛へ齒磨粉を付けて毎朝ゴシ／＼磨ける譯だ、何だ面白くも無え、……と新聞紙は其の儘丸めて棄て、終うと今度は愈々所在がなくなる。少人閑居して何とやら言ふが不善を爲すにも爲しやうがない、矢張り考へ込むより能がない、こんな事なら藏つて置いた講談の豆本でも持つて来りや好かつたが今更取りにも行けない。

「おい、玉村起きろ、おい」と揺り起されると、之れは爲たり自分とした事が、帽子を顔の日蔽に干場の欄干へ凭つた儘で晝寢の夢

が現を辿つて居る暢氣さ、何時か軍隊の恐くなくなつたと見へる。

「飯を食つて来い」とこれは古兵君が飯の間だけ交代とある。

「おい、暢氣だな……」

「は、はい、好い天氣ですな」と取つて付けのテレ隠くしを言つて干場を下りて内務班へ歸ると營内は眞暗、日向の眸は室内には通用しない、そゝくさとお飯を食べるが何時にない御飯の不味い事、整頓棚を引繰返して引張り出したのは豆本の梅曆、読み差しの頁が舌を出して居やがる、之れを衣囊へ忍ばせると、又もや干場へ番人と出蒐ける、古兵殿は馴れた者で干場へ寢そべつた儘、堅パン片手に新聞を披げてゐる。

營門の風紀衛兵の喇叭を吹いて、歩調み揃へた兵隊が野外演習から歸つて来た時は、梅曆も読み終つてウーンと反伸を力一杯した時である、干物を兵隊さんが取り入れるのが一騒ぎあつて、私の今日のお役目は終りである。——思へば干場當番なら毎日でも爲たい。干場で思ひ出すが、先濯位面倒臭く嫌なものもありや爲ない、十二月に入隊して一月二月の酷寒に水道の水でチャブ〜、手は凍縮むで折れさうだ、併も自分のだけなら未だ爲も、下手を間誤付くと古兵の奴に仰せ付けられるから堪つたものぢやない、私なんか自慢ぢやないが要領宜敷を得た所爲か一度も仰付けられ無かつたが可愛うに吉岡の奴は、上等兵が戦友で、洗つて呉れとは言はれないが穢

れた襦衣や洋袴下を洗へと言はぬばかり故意と、吉岡の寢臺の下や整頓棚の上に入れて置き、上等兵め、其の洗濯物を横目で見ながら吉岡に「乃公は忙がしくて洗濯する暇が無いので困つちまう」と繰り返す、吉岡たる者 勢ひ洗濯せざるを得なくなる、恚うして彼の寒空に上等兵に御奉口、他人の事ながら氣の毒になる……所が此の圖太い上等兵の仕業が曝露て上等兵ともある者が嫌と云ふ程油を絞られたから痛快仕極と云ふのは班長が吉岡が他人一倍石鹼を請求するので氣が付いた事だと云ふ。

「お前はよく石鹼を貰ひに来るが、お前は誰かのを洗濯して遣るんぢやないか？」と聞かれた奴さんはい、「上等兵殿のを洗ひます」

と言ひ度いのは山々だが、後の崇りが恐ろしいので「いゝえ、はい
ッ」と頗る曖昧模糊たるものである。「お前の戦友は誰か？うん歌川
上等兵だな、宣し」と来た、後で何か無ければ好いがな……と思ひな
がらも洗濯終へて、干場へ吊して居ると班長殿の御來臨、急ち襯衣
に記した上等兵の名前は判名に及ぶと、

「お前、歌川上等兵のを洗つて遣るんだな、歌川が洗へと命じたか
？」と来た、命じたのではない事は事實だか命じたとは云へない
「いゝえ、上等兵殿はお忙がしさうで、お氣の毒でしたから洗つて
上げたのです」

「真到か？宜し」憊うした會話が干場で行はれた其の晩、班長室へ

上等兵に來いとある、出蒐いた上等兵が「何か御用ですか」が始ま
りで「お前は戦友に洗濯をさせて居るぢやないか？」いゝえ私は存
じませんでした」

「馬鹿言へッ」と憊うなると上等兵だつて班長には頭が上らない、
「吉岡が、お前が命じたと云つたぞ」と班長は人が悪いのか、吉岡
が遠慮して吩咐口が出来ないと思つたのか、鎌を掛けて上等兵が命
じたのか否かを取り調べる心算らしい

「いゝえ、命じた覚えも無ければ吉岡が何時私のを洗濯して呉れた
のかも知りませんでした、今後氣を付けます」と言つたが、それか
ら約卅分間、班長殿、夜の無聊凌ぎに上等兵の油を絞つた揚句

「吉岡もお前に命ぜられたとは言つたのではないが一寸鎌を掛けて見たんだから其の心算で……今後氣を付けろ」で放免、上等兵め内務班へ歸ると當るの當らないの四方へ八ッ當り、其の時の吉岡の情なさうな顔つたら……可愛想のやう、

入浴當番

——三助さんでも兵隊だよ——

週番上等兵殿の「明日の勤務を達す」で何の事だ乃公は入浴當番正に三助を被仰付れたのだ、軍隊へ入つて三助まで爲やうとは夢にも思はなかつたが、眞箇に莫迦々々しい、三助なんか爲たつて戦争

が巧くなる譯でもあるまい、苟も國家の干城に風呂を焚かせるとはそりや聞えませんでした、入浴なら入浴で軍隊で三助の専門家を雇つて置いたら好さうなものぢやないか、吁馬鹿々々しい、人を宛で立ん坊が食ふに困つて轉り込んだ厄介者の様に扱き使やがる、人權蹂躪も甚だしいや、一態乃公に三助を仰付ける本家本元は誰だ………：「なんかと床へ入つても口惜いやら腹が立つやら情無いやら夜中の二時頃不寢番に叩き起こされ睡きたい眼を擦りく、不性無性に風呂場へ出蒐ける、風呂場の裏手から風呂釜と洗場へ分れて湯槽や流場を一先づ洗つて栓を打つて水道の栓を捻つて來るのだが風呂場と言つても汗や塵に塗れた一箇大隊の兵隊が入れ代り立ち代り入るのだ

もの、街の錢湯より未だ大きい、併も、湯槽は下士と兵隊のと別になつて二つもある、それを竹の篩でゴシ／＼擦る、湯槽の中の臭いこと／＼、襯衣一枚に洋袴を膝まで捲つた三助姿、自分ながら淺間敷い、家の阿母さんに見せたら泣き出すだらう、加之に古兵の鶴田の野郎、此の二三度御神酒を献げない所爲か御機嫌頗る悪い、「お力を入れて洗はないと粘々が却々取れないぞ、要領が悪いな」と乃公のするのばかり見てやがる、巾ちん乍ら乃公なんか今まで風呂の掃除なんか爲た事は無いんだ、こんな三助なんかの爲る事に要領が好くて堪るもんかい、同じ勤務なら手前もやるが好いや……何だ手前は先達の日曜の歸營に遅刻しやがつて使所掃除の勤務に當てら

れて、怎うだ金隠しを洗つて居やがつた態つたら無いぢやないか、と腹の中では馬鹿には爲て居るもの、迂濶口返答して横髪ボカリ喰うのも感心しない、茲だ一番奥の手を出すのは「鶴田さん、今度の日曜には淺草へお供爲やうちやありませんか、え」と愛想を作つて見せると、怎うだい此の野郎本到に現金な奴だ、「乃公が洗つてやるからお前は彼方で休んでろ」と吐しやがる、オヤ／＼、之れで今度の日曜は此の百姓に御奉公か、嫌になつちまうな、それに是非彼女には會つて遣らなきやならないのに、儘よ。此奴を連れて行つて嬉しい所を拜ませて遣らうか？ とすると後が恐いしな、家では家で新らしい抱妓が來たと云ふから會つて見たいし、「おい何を仄然

考へ込んで居るんだい？」と鶴田の野郎奴、今度は先方から愛想が
 好いや「だから若旦那は困るね」と來やがる、此の薪の燃え難いこ
 と、乃公は未だ風呂焚の経験が無い、畜生、又消えちまやがった、
 「鶴田さん、怎うも薪が燃えませんがね」慫うなりや此方の物だ、
 一番古兵に押付けろだ「爾うか何れ」と來た、有難いね……をやを
 や誰だい？ 流場を洗いながら二上りなんか唄つて居るのは？ 眞
 箇の三助みたいな奴だな、吉田だな？ 何か嬉しい事でもあるのか
 大分浮れて居やがるな、今に見ろ、威嚇されるから……

午後三時、そろくお客様御入來だな、をや來やがった、今日は
 第九中隊がお先だね、靴を盗まれないやうに用心しろよ、先達乃公

は外出用の靴を窃げられて、お蔭で他人のを窃むべく餘儀なきに至
 つたぢやないか、それも窃まれた乃公のより餘程汚なくつて併も
 ブカ〜の大きな奴、馳歩なんかやつたら脱げ終う、何しろ風呂へ
 來たらば靴用心が肝心だ、誠にはや物騒千萬、帝國軍隊で此の靴泥
 が行はれるとは歎かほしい次第だ、併し昔スバルタとやら云ふ國で
 は泥棒教育を施して國民を強く且敏捷ならしめたと云ふから之れも
 一面から云へば軍隊教育として必要なのかも知れんて……ほら來た
 下士殿の御入來か、小喧しい五班の班長殿だな、併し考へて見れば
 馬鹿な話だ、街の錢湯なら風俗の上から云つても湯槽を二にして男
 女の混浴を許さず、間に劃を爲て置くと云ふのは聞えた話だが何も

間に劃を爲ない位なら下士だつて兵隊だつて同じ湯槽へ入つたつて
 差障へなさうな物ぢやないか、何も下士だと云つてそんなに見識
 振なくたつて宜さうなもんだね……何だ？ 湯が緩いつて、莫迦
 に爲るない今沸かしたばかりの湯が初めから熱くなつて堪るもんか
 い、今に見てやがれ、熱いのを一度に注入に及んでやるから、「鶴
 田さん今度は私が焚きませう」これだけ燃え付いて居りや後は樂だ

は、大笑ひ、大笑ひ、怎うだい？ あの周章やうたら無いね、
 熱がりやがつては、熱湯溜の栓を一度に抜いてやつたんだから
 ……はい、だ、おやく、來やつた、上手兵殿の血相たらない「は

いッ緩さうでありましたから」「馬鹿ッ不意に栓を抜く奴があるか
 ツ」ボカリ痛ていッ、畜生奴、行つて終やがつた、何かと云ふと殿
 りやがる、何班の上等兵だらう？ 恐ろしく痛い拳固だな、御同僚
 新兵諸君が思ひやられらア。

面會所

別嬪來る、演習抜けの一手

威嚴つい營門に、色の眞黒な兵隊が番兵 居る所へ現はれ出で
 たのは紫紺お召の半コートに空氣草履、頭髮は廂だが此の女奥様
 や令嬢の輩でなし、何所か垢抜の爲て居る所は矢張り争はれないも

ので何家の何子と来る水商買の女である、今しがた午砲が鳴つたばかりの時分だ。面長で丸ぼちやで品があつて愛嬌のあるのは此の妓でムいと云ふ代物が番兵さんの前へ小腰をかゝめて。

「あの營内に居る人に會いに參つたのですが」と伺ひ立てると番兵さん、三保の松原に舞ひ下つた天女を伯龍と申す漁夫が眺めるやうに恐悦至極と恐縮至極を一緒にして。

「はあ——すると面會ですな」と道がに口では尤らしいが腹の中では畜生好い女だなと感服の恐悦をする。

「それでは門内の左側に風紀衛兵が居ますから其所へ御出でなさい」と至つて親切である、美形は一揖して偕て門を入つて風紀衛兵

所に顔を出す、飾り氣もなければ何にも無い羽目板の木目が凄いやうに現れた衛兵所の建物に大きな爐を圍む三十名足らずの兵隊さん乾燥無味馬鹿話を爲て居る所に此の婀娜姿の出現したので中の話

は一時に鳴りを静めて六十足らずの視線は此の美形の頭の腦天から足の爪先までに集注される、恚うなると如何程水商買でも其所は女だ、大いに面喰はざるを得ない次第で、従つて言葉も極く小さく虫の聲である。

衛兵司令の伍長殿は勢々偉い所を見せる心算か何かで先様で未だ何とも言はないのに。

「は、はい」と首肯くのを眺めて、

「何中隊の誰にです」と疊み掛けると美形君は「あの——」と言ひながら半コートの間に手を入ると一通の手紙を摘み出して

「あの——、此の人なんですが」と少しばかり羞恥みながら言ふのは伍長殿耳にもかかず「此の帳簿へ記入なさい」と帳簿を披いて穢らしい筆を差出した、美形たるもの甚だ到惑らしいが其所は道に商買柄で遠慮はしない。「誠に濟みませんが」と云ふのを受けて伍長殿も解りが早い「宜しい書いて上げませう」「は、あ、第十二中隊の玉村梅吉へ面會ですか、そして貴女のお名前は？」と伍長殿が軽く聞いたので、美形君遂打潤お里を出して。

「辰龍つて申しますの」と來た、伍長殿面喰つて。

「え、！」と目をバツチリ、美形も今更氣が付いて照れ隠しにニツと笑つたので伍長殿も「本名ですか？」と聞き直す。

「いえ、あの森川かねなんです」と道に極り悪さう、奥に居る兵隊サン達はクス／＼と笑ふ。

「住所は？ 京橋區南金六町五番地……成程さうですか、芳小川家方ですか」

「玉村との關係は」と伍長殿が更ためて聞くと、此の森川かねの辰龍妓さん何と思つたか、少し顔に險を見せて。

「何も、妾は關係なんか爲やしませんよ、たゞ知つてるだけなん

「です」と御立腹らしく、女だと思つて馬鹿にすると云ふ顔付を遊ばす、伍長殿は驚いて

二三二

「いゝえ、關係と云ふのは友人とか知人とか、又は親戚と兄弟とかで、此の面會簿には一々それを書かなければ不可ないのでね」と噛んで含めるやうに言つて聞かせると美形二度の失敗に顔を赦

めて「あゝ爾うですか、爾うですか」とお辭儀するばかり、

「それぢや彼所の面會所へ行つて待つて御出でなさい」と伍長殿が指す所は之れも殺風景千萬な田舎の交番を廣くしたやうな一棟である、美しからの腰掛けに傷だらけな卓が置かれてあるばかり、辰龍妓さん先づ之れで會へると安心の、抱へたメリンスの風呂敷包

を卓上に置くと袂から敷島に點火に及んで待つ間の一喫をやらかす其所へ現はれたのは斯く申す我輩の私である、遠く衛兵所から衛兵諸君が伸び上つて我輩の應接振を眺めて居やがる、我輩たるもの極りが悪いやうな得意のやうな……

「あら兄さん擧手の手付が好くなつたわね」

「何言つて居るんだい、馬鹿だな」

「でもね、兄さんからの手紙に来るんなら今時分來て呉れつてんでしやう、妾これでも早お午で來たのよ」

「ふ——ん、怎うだい此の頃は忙がしいのかい？」

か何かと、此所で風月堂のお土産の函を開けてバック付く、

「兄さんが甘いものを食べるなんて變ね、」

「うゝん軍隊へ入ると誰だつて甘い物が食べ度くなるんだ」

と此の所自分ながら仲の好い事驚くばかりである。抑も此の面會たるや甚だしく要領を要する奴で巧く面會人が来て呉れると何より嫌な練兵が蹴飛ばせて苦しい午後の三時間を暢氣なお話しの時間に變化させる事が出来るから奇妙である、軍隊と云ふと八釜敷しづくめで手も足も出ないやうだが慫うした所には大きに寛かな所があるものだ、午飯が済んで、午后一時から練兵と云ふ時になつて其所へ衛兵所から面會があると通知されると之れを周番下士へ申出ると行つて來ひとなる、それから後で整列となつて戦友は練兵に出るが整列

の時に上等兵が將校へ人員數の報告に面會に行つた者は抜かされて「異狀ありません」と報告するから將校は勤務幾名、面會幾名あらうが一一々其の名を呼び上げる譯ではないから知てる筈がない、乃で面會に行つた者は悠々寛々と油を賣つてお客様は成る可く永く引き留めて、愈々練兵も終りさうになつた時分に出蒐けて行つて列に入ればそれで済んで終う、中には忙ぐ來客で直ぐ歸つて終つた所で自分は面會人が何時までも居た振り度油が賣れる……故に兵隊に面會人と云ふのは有難い者で、譬へ教練最中でも衛兵所から帳簿が將校の手元へ届けられると「誰々面會人があるさうだから行つて來い、廿分間許す」なんかと云はれて面會所へ來て終へば此方のもの、將校

だつて一々時計を見て居る譯ぢやあるまいし、よし又「大分遅かつたが怎うした？」なんかと聞かれたつて「實は母の里親が死しまし
て「何とか彼とかと出鱈目の要領が巧ければ鼻が付く譯なんだ、所
で普通の新兵などにはそんな圖々しい事は無いが志願兵の仲間には
面會人の貸借があるんだと云ふから呆れて終う、お互に樂を爲る爲
めに自分の所へ面會人があると其の面會人に囁んで自分の戰友にも
面會を申し込んで貰ふ、さうすると其の戰友が練兵を蹴飛ばせると
云ふ寸法になるんだ、斯く申す我輩も志願兵小山の元ちやんに此の
傳で半日樂をさせて貰つた事がある。面白くもない徒手体操に力を
入れて居ると新兵掛りの加藤少尉が「玉村面會があるさうだ、行つ

て来い」と云ふので今頃面會に来るなんて誰だらうと考へながら面
會所へ来て見れば小山志願兵と帝國大學の學生とが笑いながら待つ
て居る。

「お菓子でもお食べよ、体操より菓子の方が好いだらう」と元ちや
ん其の學生と顔見合はせながら袋の菓子をバク付いて居る。段々様
子を聞けば「君が可愛相だつたから緒寸呼んで貰つて遣つたのさ、
此の人は僕の友達だ」と云ふ、「さうですか、有難うムいます」と
御禮を云つて後は三時間ばかり夕刻まで暢氣な事、實に有難かりけ
る次第である。

面會所

儲ても其の後辰龍面會に來ての事が班内に有名となつて冷かされる事、古兵達が岡焼半分に擲揃れるので閉口、それから後は一切女禁制のお觸れを出したが、新兵に面會のある事は古兵が喜ぶから奇妙と云ふのは新兵に面會に來る者は必ず何か土産を持つて來るのが付きもので従つて古兵は其のお福分けに預る次第と云ふさもしいで面會人の時ばかりは古兵め親切で「用は乃公が爲てや」から早く行つて來い〜」

外出

——行きはよい〜、歸りは怖い——

1

入營間もなくの外出も、三月、四月經つてからの外出も同じ嬉しさの角度で待ち侘びて居る。兵隊サンに外出は生命の洗濯、可愛い女があつても、無くても外出は思ふても胸が戦々する。それが春ならば發庭の隅の櫻が爛漫として咲き亂れ、街の動搖が營庭に週番士官の服装検査を待つ間に既に、窮屈な兵隊サンの心を打寬げ、自由に空想の翼をそれ相應に擴げて兵隊サンらしい満足、兵隊サンらしい誇を感じて、自分自ら恍惚とした空氣に危まれて亢奮せず居られなくなる。週番士官は、かなか出て來ない。心はいしいらして、脚は衛門の外へ踏み出す、或者の心は活動寫眞のフィルム

外出

に踊り、或者の心は格子先の痴話事に奪はれる。兵隊サンらしい力士な祈願が膨脹して来れば来る程、一分二分の時間の経過が擴大されて、聴ては週番士官の心情に不平怨恨の雨を降り注ぐ。將校なんか毎時でも出たい時出られる身分、自分達となつたら五分を争ふ外出だ。少しは察しても宜ささうなものだ……蓋し斯う思ふのは人情ではないか。

来た。来た。——週番士官が鷹揚に構へて来た。

「氣を附けッ。——前列二歩前へ。」

週番士官の眼は俄かに輝く。而して猶且つ服装検査に姿勢まで文句を並べてゐるのだが、時間の長いのは宜なる哉だ。一体姿勢の

崩れるのは何故でせう？ その人間の心理状態に觸れしば自明の理
 なんだが……。

「お前は服の塵を拂つたのか。」

「……………」

「おい。出る前に服を拂つたか。拂はんだらうアーン」

「ア、今朝起床後拂ひました。」

「嘘言へ。」

週番士官殿やをら隣の奴の肩の邊を、汚穢物でも弾く様な怪しい手附まで、二ツ三ツバツバツと弾く。塵埃が、朝の光に金粉の如く麗々しく舞ひ騰つたので、首を縮めて苦虫を潰した様に不景氣な面

をして週番士官の顔を窺視してゐた。果然小破装!!

是でも拂つたのが。戻へ。——班へ往つて拂つて来い。」

澁面で——でも一目散に馳けて往つた。今度は週番士官が、僕の

後へ廻つて来たんだ。此の背後へ廻られてチロチロ欠點を探されて

ゐる位、躰のムズ痒い、擦りたい、厭に息苦しい切なさを覚える事

はあるまい。勘くも僕は大嫌いだ。

「おい。」

「……」知らぬ半兵衛を極め込んで済してゐた。

「おい。吉田」

「ハイ。」

「この襟布は何だ。何時洗つたか。こんな襟布で外出が出来るか
取り換へて来い。」

「……」何とか手段が無いものかと突瑳の思案最中。

「急いで往つて来い。」

班へ戻れば又靴も脱かねばならず、儘よ大膽、無いと云へば助か
るだらう、浮んだ悪い了見。それに丁度洗濯が面倒だから、外出
の都度買つて来て汚れると銃拭に變るので、今日の外出に買つて
歸る答で無いのを幸ひに

「ハイ。襟布は今無いのであります。」

「何ッ。無い。諾ッ。ちや今日は外出は止める。恁んな襟布で外

出が出来るか。

二四四

「南無三寶。襟布位で外出止めを喰つて堪るもんぢやない。」

「まだあるかも知れませんが、早く見に来ます。」

苦しきまざれに列を飛び出して、早速班へ歸つたが、在らう答なし
猿智慧を廻して汚れた表側を裏返して、宛然新品の如き体裁、愆う
してをれば襟の出る所だけ奇麗薩張りしてゐる。

「週番士官殿、手箱の奥にありましたッ」

「諾ッ。まだ新しいのがあるのに狡いぞ」

新しいと思ふが狡いので、舊いのだと思へば寧ろ尙ほ狡い答だ
愆う云ふ形式的の機微に敏感でないと兵隊サンは、兎角損をする事

になる。次へ、次へと服装検査、姿勢の御叱言に無事に通過する者
は僥倖だと思ひたい位だ。是も世話に謂ふ、兒を想ふ親心なのだら
うが、由來親の心、兒知らずで、唯最早一刻も早く衛門を飛び出し
て、足の向く儘に歩かしてやりたいばかり。

「分れッ」の號令一下、池中の鯉が麩を目懸けて突進する様に、衛
門へ直往邁進する。一人一人の背後から荷札を附けたら、曰く活動
寫真行。曰く遊廓行。曰くしるこや行。曰く銘酒屋行。曰く馬肉屋
行。曰く……。

春光熙々として戯れ、徒に人間の魂を蕩かす春四月、彌生

の頃は兵隊サンの外出時間の轉た短かきを咥つ時だ。社會が花に
飲み月に唄ふてゐる時、歸營時間に心迫かれて歸る切り上げが、又
云ふに云はれぬ味があると負け惜味に云くば云へない事もない。

「おい、秋本歸らうせ」と促して云てた時分には夕食喇叭に一時間卅
分。その秋本も、須田も大銘酌。酒を飲んでも呑まれはしないと氣
焔を擧げてゐた僕自らも少々怪しい。

「おい。須田、早くしろい。遅刻するぞ」

「迫くな。迫くない。是れ遅れりや重營倉——だ。」

須田も、秋本も酌婦に戯けて歸る様子も見へない。生酔ひ本性を
失はずで、歸營時間を忘れる程酔潰れもしまい。こゝらが切上げ時

と一人で武藏屋を飛び出す。衛門近く來ると前後は軍服姿が一つも
見えない。こんな筈ではなかつたがと思つて、苦しい動悸を抑つて
駈足。衛門から一町程も來ると、丁度夕食喇叭の終つた余韻が、水
蒸氣の多い中空に迷ふてゐる。夢我夢中で衛門に驅附けて、軍隊手
帖を出すよ、

「貴様、何時だと思ふ」

「ハイ」

「何中隊だ」

「ハイ」

「何中隊の誰だ」

「ハイ。悪くありません。」

「貴様、遅刻は重營倉といふ事は知つてるだらう。」

「は……………」

「歩哨、此奴は俺の班の奴だから、今日は許して入れてやつて呉れ。」

丁度交代係で来た中隊の上等兵に、辛而助けられて中隊へ駆けつけるると、中隊中大騒ぎ。初年兵三名未だ歸らないと云ふ有様。して見ると他の二名は未だ歸營しないと見へる。僕は班へ駆け込むや否や、

「上等兵殿、誠に申譯がありません。」

「馬鹿、貴様何をしてゐた、ウ、酒を飲んで来たな。馬鹿。中隊で皆が心配して居るのが分らんか。」

「ハイ。悪くありません。」

「悪いに極つてら。秋本も須田も一所なのだらう。」

「……………」

自分は駈けて来た勢で、心臓の動悸は激烈を極めて、何とも云ひ様なく胸苦しい。耐え切れずに整頓棚の所へ首を突込んで、突伏して泣いて見入。何だか涙が出る様だ、汗かしら？何しても苦しい、此の涙だか、汗だか解らない液跡が、如何に有効であつたかは後で解つた。

斯うしてゐる處へ後の二人は悄然として曹長殿の尻に附いて引張られて来た。

「玉村は悪かつたと思つて駆足で歸つて来たし、見る非常に後悔して泣いて居るんだ。」

突伏して苦しんで居る僕の内心頗る探つたい。非常に後悔してゐる僕を指してゐるらしい。「貴様二人は如何だ。曹長殿が逢つた時歩いてたつて云ふじやないか。」と云ふ上等兵殿の兩掌が頗る不穩に活動を初める準備をしてゐる様で、不安でならない。「それに――」大分言葉が暴れ模様だ、「古兵だつて時間迄、酒なんか飲んでゐる者はないぞ。何だ、生意氣な初年兵の癖に……」

到頭時節到来だ。初年兵なる事がその最大原因をなして、ビシヤリビシヤリ、と「びんた」の音が冷たい壁に無心に響く。身も世もなく寂しい、怖しい、而も陰惨な響だ。それでも幸か、不幸か後悔の情歴然たる件を以て、「びんた」を免れた僕は運の好い男だ。だが流不の好運兒も、顔色蒼白、枯影悄然たるものだつたとは後で人の噂。その時ばかりは當分は酒保の堅パンを心潜かに誓つた。

脱營

——自暴自棄怎うでもなれ——

軍隊で脱營へと云へば輕からぬ罪である重營倉か衛戍監獄かに打

込まれて懲役人の仕事をせねばならぬ、併も其の犯人を出した中隊全部の成績にも關係して善行證の數も減らされる。されば軍隊では中隊で事が済むなら内密に事を済ませて鼻を付ける事が往々ある、それが爲め脱營と云ふ重罪を犯しながら拳固も食はず、少々ばかり叱言を聞いただけで内濟になつた者が居た、これなどは賤に軍隊が嚴格のやうで一方憊うした情實のある事を物語つて余りあるぢやないか、

毎朝の新聞に發診質扶斯流行の記事が絶えず、今日は何所で幾人明日は幾人と質扶斯患者が現はれた時分である、軍隊ではこれが感染を恐れて折角の日曜も外出止め兵隊さんは泣面を爲ながら其

の日曜を營内に暮さなければならなかつた、と乃には商賣に扱け目のない寫真屋が居て、練兵は無し演習は無いで營内でゴロ／＼して居る兵隊さんに寫真を寫させる爲に營内へ商賣に来て居る、兵隊さんは色々な姿を爲ては寫真を撮つて貰ふので寫真屋さんも却々忙がしい、恰度其の時分の事、私の班では午餐を終つて食事當番が飯盒や食器を下げて居ると新兵の尾崎と云ふ男、營内で着て居る汚ない作業服を外出用の三装用に着換へると着劔し班長室へ出蒐けて何氣ない様仔で「只今寫真を取りますから」と用もないのに着劔するお断りを爲て置いたかと思ふと班を出て行つた尾崎は、其の儘行方知れず何所へ行つたか皆目知れなくなつて終つた、夕飯は濟んだが

未だ歸つて來ない、憊うなると班長の心配一方ならずである。班の兵隊を營内中へ派遣に及んで搜索したが酒保は勿論倉庫の中から便所の中まで一々覗いたが遂に尾崎の姿を發見する事は出来なかつた。班長は其の數日前も兵隊の一人に姿を晦まされて閉口した、それは班内第一のズベラ坊で小野と云ふ古兵、演習が嫌さに演習中便所へ行き度いからと云ひ出して許しを得ると其の儘、姿を晦して終つた。そして愈々演習が濟むでも歸つて來なかつた、併し班長は自己の責任と他の兵士の迷惑を顧慮して演習終了後將校へは人員に異狀無しと報告したので小隊長には知れずに濟んだが、兵士を探しに遣つて見ると小野は便所の横手で晝睡を爲て居たとの事に余り怒らない班

長も道に腹を立て、小野を連れて來るなり不動の姿勢を取らせて置いて鼻柱をビシリ／＼と中指で弾き飛ばした、小野は痛さに涙を滾しながら油を絞られて事が濟んだが今度の尾崎のは消燈前の點呼になるると云ふのに姿を見せないのだから班長は自分だけでは事が濟まされない勢ひ中隊長の耳へも入れねばならない羽目になつた、愈々點呼となると班長は周番將校に事の次第を報告した、それが爲め中隊長の將校は悉く班へ集り戰友に尾崎の様子を種々尋ねたり、搜索方針を協議したりして結局中隊の下士は悉く公用證を中隊から受け取つて營外の心當りに搜索に出た、下士の一人は其の晩直に尾崎の郷里だと云ふ埼玉縣まで出蒐けたり又一人は尾崎の馴染が居る

と云ふ吉原を探したりしたが遂に其の夜は行衛不明だった。併し中隊の周番將校は前にも言つた通り憊うした犯人を出すと中隊の成績に關係するので聯隊には第十二中隊異状ありませんと報告して丁つた。翌日になつても尾崎は歸つて來なかつた、搜索は依然繼續されて下士も上等兵も果ては尾崎の身上を知つて居る戦友は何れも公用證を風紀衛兵に示して外出し尾崎が知つて居ると云ふ家を悉く探したが其の第二日も皆失敗に了り、「自殺でも爲たのぢやないか」と遺書でも無いかと調べたがそれらしい物は見當らなかつた。所が第三目に搜索に出た下士の一人は、諸方で尋ね尋ねして漸く尾崎の叔母に當る家だと云ふ日本橋のある下駄屋を尋ね出した、そし

て其の家の様子を往來を隔て、窺つて見ると其の店に尾崎は暢氣千萬な縞の着物に角帯を締め込んで、店の其に家の小娘を對手に店番を爲て居た、下士は早速其所へ飛び込んで有無を言はさず捕まへて了つた。其の叔母の家では吃驚仰天して居る有様に、段々話を聞けば四五日歸休で外泊を許されて居るとの事なので脱營とは知らずに置いたのだと云ふた……尾崎は其の儘隊へ連れて歸られたが中隊長も自分達が騒いだり心配したゆけに尾崎の暢氣な仕打に呆れた、併し中隊長は却々思慮のある人なので尾崎を叱つたり油を絞つたりする以前に何故に脱營し重罪を敢て爲たかを責問した。

尾崎が脱營する原因は彼の戦友が上等兵で其の上等兵は中隊中一

番どん尻の上等兵で氣難がし屋で併も口喧ましく田舎べーで生意氣な尾崎には怎うしても其の御機嫌が取り切れなかつた、それが爲めに尾崎は常に其の戦友の上等兵に油を絞られ通しであつた、それに折角樂しみに爲て居た日曜に外出が出来ないので度くなり、殊に其の朝上等兵に寢臺の整頓が宜いとか悪いとかで散々痛め付けられたので情々軍隊に嫌氣が差したので怎うなれと儘よが自棄のヤン八となつて居た矢先、倉庫裏の非常門から被服か何か運び込むので開いて居たのを見たのでフラ／＼と脱營する氣になり、其のまゝ叔母の家へ行つて終つたと云ふ、いづれは見付け出されて怎うにか爲されると覺悟は爲て居ましたから別に逃げも隠れも

爲ませんでした」と悪法もせず中隊長の前で述べ立てた、中隊長は早速尾崎の所屬する班を代へて了つた切りで別に苛い譴責も與へなかつた。其の代り例の上等兵は散々お小言を頂戴した、これで此の脱營事件も表沙汰にならず憲兵も煩はさず内済にして濟んだが……脱營したお蔭に嫌な戦友と離れる事が出来、却つて其の戦友が叱られたと云ふ事が我が軍隊の爲めに嬉ぶべき事であらうか、私は此の一話柄を掲げて讀者の判断を乞ひ度い。

炊事當番の朝

—— 權助は辛いねだ ——

今日は炊事當番、權助の役廻りである。何故だか知らないが軍隊の權助は必ずゲートルを穿いて居なけりやならない、服は汚ならしい肩章も無い作業服だ、自分ながら見窄らしい、衛戍病院の小使みたいな恰好だ。

魚屋の由公は、御料理仕出しの商買柄で急ち炊事の週間勤務になつて、毎日朝から晩まで炊事場に居やがる、練兵だ教練だと五月蠅い事は爲ないで済むだらうが、彼奴こそ軍隊へ權助に來やがつたやうなものだ、彼奴は正に陸軍權助二等卒だ、

「おい由ちゃん、お早う」

「若旦那、今日は炊事ですか？」

「あゝ爾うだよ、……おいお止しよ若旦那なんて言ふのは」

「でも然う言ひ付けられたもんで……今更玉村さんなんて呼ぶのも變ぢやありませんか」

「おいッ何を愚圖々々言つてるんだ？ 早く米を磨いぢまへッ」ほらお出でなすつた、炊事軍曹！「若旦那宜うムいますよ、私が出つて上げますから」何を言つてるんだ！ 若旦那とは誰の事だ？」

「いゝえ、此方の事なんです……」はゝゝ有難いもんだね、家へ出入して居たお蔭で、由公も忙がしいのに乃公の代りに爲て上げますは嬉しいね。

「呀、炊事當番、朝の四時には叩き起され下が敲土の此の炊事場凍

て付いた水が何んだか臭い、冷たい水道の水で米を磨ぐ、又木になつた摺木で掻き廻すのが却々動かばこそ、お、冷たい、家の姐やだつて此の寒さぢやお湯で磨ぐぢやないか、何に澤庵を切れつて、情ないね、え、怎うだつて關うもんか、澤庵は厚切に限るんだおいつ洗つてから切るんだツ」「はツ」さうく、乃公様とした事が、糠の付いた儘切つたのは一代の不覺、「そんなに厚く切つて怎うするんだお前は一日の給養を知らないのか？」「はいッ澤庵は厚切れが甘味うあります」馬鹿ッそんな事を爲たら足りなくなるぢやないか」「はいッ」何だ、炊事軍曹め、吝嗇たれ事を言やがるな、をや、由公、お味噌汁の身を切つてやがる、葱だね、随分亂暴な切りやう

だ、あッ葱の俵を入れちまやがつた、あれを入れると臭くて不可ないをや、尻尾を抛り込むのは酷いな、「おい、飯の湯が沸いたぞ」軍隊の飯の炊きやうは面白いな、大鍋に湯を煮立て、から米を入れるのかい、成程ね、その方が早いのか知れない、「玉村さん、片棒頼む、それ宜しかッ」あッ熱いッ徐々入れないと煮湯が跳ねら

何班のだい？ 此の飯盒は随分汚ない洗いやうだな 其の儘隊は突返してやれッ 「はいッ」とは返事を爲たもの、これを隊へ洗ひ方が汚ないからつて突返せば誰か知ら初年兵は横髪へ一ツ痛い

を頂戴するのは知れた話、武士は相見互だ、炊事軍曹め行つちまや
がつたから此の儘飯を詰めて置いてやれ。

あれ、呆れたね、お味噌汁の味噌を濃さないのは！ おやお化敷

いな「此の味噌には豆が入つてない」「由ちやん、此の味噌は何てん
だい？」「何、これは糠味噌でさあネ……若旦那御存知ないんです
か、江戸兒のやうでもありませんね」

「知らないね、慥味噌は、お味噌汁つてやつは矢張り毎朝、紅い
手絡の可愛い女が赤い襷掛けか何かでゴロガラやつて貰はないと氣
持ちが好くないね、こんなのは看護婦上りか何かの無性な嬬が使う
んで、江戸兒は知らないね」「おいッ何を言つとるッ赤い襷が怎う

したと？」「はいッ」「ほら御覧なさい、若旦那、そんな事を言ふ
から」「でもお前爾うちやないか、こんな糞みたいな味噌……」お
止しなさいッたら若旦那「馬鹿ッ若旦那とは何だッ……内密話な
んか爲るなッ」炊事軍曹殿、到々御怒り遊ばしたな、へーんだ、軍
曹殿と云へば立派だが、巡査の試験に落第し、仕方がなしに軍隊の
権助、炊事元帥を志願して……残飯屋の番頭に吉原を御馳走になつ
たのは、手前だらう！
「早く爲ろよ、もう喇叭が鳴るぞ」
「はッ既う出来ました」
カツコメ〜喇叭が朝の營内に鳴り響くと、各班の兵隊が拙手な

吊台を昇いで、お飯と、馬臂のお味増汁と、そして澤庵のお香物を取りに来る、……炊事場は急ち火事場の炊き出しのやう。

火災呼集

——火事の稽古に旅團長閣下の検閲——

随外検閲の済んだ午后の事、練兵は無しするので用の無い者は營内でブラ〜、洗濯する者は洗濯場でゴシ〜、酒保へ行つた者もあり、手紙を書いてる者もある……と營門の風紀衛兵から急ち、ヤケタゾ——ヤケタゾ——と喇叭の音は、言はずと知れた火災呼集の喇叭だ、それツと云ふと

今まで散々に居た兵隊は一齋に内務班目蒐けて馳け付け、各自寢台の前へ勢列して命令の來るのを待つて居た。

そも〜火災呼集たるや火事もないのに何故に恁麼人騒せを行るかと云へば、若しも不時の出火に狼狽せぬやう、又大事な物を焼かぬやうにと豫め用意をさせる爲めには時折之れを練習し置く必要があるとするもの、殊に班付伍長などの口からは検閲が済んだから「火災呼集でも行られさうだな」などと云はれて居た事だから豫て教へられた通りに「内務班へ集れツ」の號令と一諸に寢台の前へ……と風紀衛兵所から衛兵が「第二倉庫より出火、東南の烈風にて目下盛んに燃えつゝあるツ」と營内を囂噂つて歩く、

第二倉庫と云へば私の中隊の直ぐ前だ、従つて私の中隊が一番危いと云ふ事になる、此の日の周番將校は小松少尉である、直ちに避難用意と號令が出る、それツと云ふと或者は急ち銃架へ馳け付ける、劔に彈藥盒を昇き出し、酒保の裏の空地へ來ると銃は悉く又銃される、一方では毛布を廣げて其の中へ折角几帳面に整頓された整頓棚の物を悉く入れて之れを四方から結び付け、何時でも窓から下へ投げ出されるばかりに窓際まで昇き出す、或は中隊の廊下の倉庫へ馳け付けて、中を開いて、目星い物は悉く何時でも出せるやうに縛つたり、廊下にある芝居の花道にあるやうな「すつぽん」を二階のも三階のも蓋をあけて此の穴から三階の品物を階下の廊石

下へ落せるやうに爲たり、或者は中隊本部へ馳け付けて中隊の重用書類の入つて居る書棚や書函を其の儘空地へ昇き出す、それは大變な騒ぎ、併も中隊々々で交代に受け持つ消防隊からは消防手が出陣に反んで水道の栓は抜かれる、蒸氣唧筒は出されて火元と指定されを第二倉庫の屋根へ瀧の如くに水を浴せる……と急ち鎮火の喇叭が營内に響き渡ると全時に聯隊本部からは檢閲を爲るから各中隊は其の儘に爲て置けと云ふお達しが出る、聽ての事に旅團長閣下を始め聯隊長やら大隊長、軍隊での偉い人が悉く、此の亂雜の間を見て廻つた、此の火災呼集では私の中隊と、隣りの中隊が火元に一番近いと云ふので避難動作を爲たのは此の二個中隊だけだつたが、

其の時私の中隊は周番將校の小松少尉のテキバキ爲た命令が悉く行はれたので一つとして間然する處無く誠に遺漏なく火災呼集に對する動作が出来得たとあつて小松少尉少なからぬお褒めに預つたが隣りの中隊の周番將校は木本と云ふ新品少尉なので不時の火災呼集に面喰つたのか、内務班の方は少しも遺漏無く行つて退けたが、中隊本部の動員調書など重用な書類の入つた書棚などを其の儘に爲て置いたので、若し實際に火事だつたら焼けて終つたと注意を受けたとの事……これで火災呼集は終つたが後仕未の大變なこと、立派に整頓してあるを悉く滅茶々に毛布に包んだりしたので、圓匙を怎うして終つたの靴が無いの、水筒が見えなくなつたとか飯盒が潰

れたのと一通りの騒ぎではない、恰度其の時、私はお肚の具合が悪くて練兵休だつたので此の火災呼集では働かずに又銃してある所の番人にされ、人々が夢中になつて騒いで居る間は塀越しに兵營の堤下の街を眺めて居たが、後仕未には、之れを見て居た古兵達に、うんと扱き使はれて氣が入居ないだけ却つて酷び目に合はされた……平常から火事の稽古を爲るのは消防夫の外には軍人りであばからう。

歩 哨

——女と兒共に窘められ——

歩 哨

此所は日本國の金庫日本銀行である、衛戍地内の一厄介物である各聯隊が毎年交代で此の門の守衛を受け持つのだ。其の受持の何時間が私のお役目に當てられた譯である。

天氣は佳いが未だ春は浅い二月の末の、日は照りながら底冷のする、鼻の頭が痛い日である。今しがた濠を隔てた印刷局のピーが鳴り響いたばかり、上等兵に引率されて日本橋本町へ通う往來の門口の哨舎の前へ不動の姿動を取つた私は交代の芳野と目禮を代して、それから五月蠅い「守則」を申送られる。怎うせ敵が来る譯ぢやなし、私の外には請願巡查も監守人も居る事だ、何も私が「守則」を知つて居やうと居まいとそんな事は問題にはならない、嚙の空で申

送られて愈番兵さんと相成つたり。寒い地を這う風が外套の裾を捲し上げて通ると、乾いた濠端の塵が濛々と立つ、其の後から用もないのに豆腐屋が喇叭をブーと吹いて通つた。もう方々の會社の引け時分、脊廣の叔父さんが電車に積まれて運ばれて行く。

偶と目に付いたのは十軒店へ雛人形でも買ひに行つたか包を抱えた女中を連れ奥様風が、おつ嫂嬢とお歩ひ遊ばす、手に持つ造花は桃の花で思ひ付いたのだが、娑婆に居りや三月三日のお節句には、家では私一人のお客様、お袋も叱言を言はずに抱妓達と遊ばせるそれに引換へ去年も今年も男の中の男を集めた兵營生營、優しい氣は既うに何所かへ飛んで、今は全くの兵隊氣質四角四面に爲すこと

成す事角を付けて、言葉の端にも娑婆で使はぬ軍隊言葉、荒い事の大嫌いな私が野暮だと云つた人の喧嘩沙汰なら面白くつて一日でも見て居たい。それに付けても怎麼に私の氣持は變つたらう。後九ヶ月で除隊にはなるもの、勝手が解つて見れば兵營も左程に恐くはない、常日頃なら五人か六人の友達相手の私にも何十人となない戦友が出来て、起臥も苦樂も共に爲す所爲でもあらうか、分け隔てのない友情は娑婆では知らなかつた軍隊の温かさである。辛い苦しいと思つた演習教練も要領次第で樂にならうし、其の苦しさも僅か一時の我慢、人間業で出来ない事を爲せるのではないとも思ふ……。

思へば過去の一年間は苦しさ恐はさで無我夢中だつた私も今は歩

哨に立ちながら桃の花を眺めて楽しい年月を思ひ出すやうにも成つたのだ。箆が緩んだのか餘祐が出来たのか、今では肩の星も二つに増して自分の下には新兵さんが戦友で何かの面倒を見て呉れる。自分分は去年の古兵に散々世話をさせられて、恐がりながら御世辭を言つた、その嫌な思出に今年の新兵を可愛がつて遣りませう、軍隊常用の「申し送り」と云ふやつで、自分がされたから、其の次の新兵にも爲てやらうなぞとは私は思はない。その心掛けが功德となつてか、新兵達は上等兵より私の言ふ事を好く聞きもする、又眞身になつて私の世話も爲て呉れる、昨夜も古兵仲間と新兵達の油を取つて居たのを私が茶々を入れて新兵を助けて遣つた。今朝面洗所で新兵

達は私に「昨晩は有難うございました」と心から感謝の色を顔に出して禮を言つた、水を酌んで呉れるやら襦袢が濡れないやうに後から押へて呉れるやら、思へば親兵位可愛想な可愛好い者はない、其の新兵が去年の私だ。それに引代へ吉田の奴は一等卒に成り損ないの腹癒せか新兵達に當り散すこと、私が居ないと辛い事をしやがる。上等兵も私と同年兵熟くもないから内務班では私の外第一に一等兵になつた四名がお頭株だ、これも私が去年の今頃不寝番の其の時に乃公は軍人だと云ふ悟を開いて、要領を使ひながらも、動作は拙でも何所かに真面目が現はれたお影であらう。新兵達も此の悟の目が開けば辛ひ思ひが半分で済む。軍人精神……私も何時か本到の軍人

になつたのだ……と思ふと一年も着付けた軍服姿、軍装の勇ましさ
を今更のやうに眺め廻す……

寒い風が又一陣電線に高鳴をした。

「あら、兄さん」

「あら、まア恁麼所へ……」

と言はれて氣が付くと、家の抱妓の菊坊が、松本樓の女中のお秋と二人で物珍しさうに、私の番兵姿を見付けて寄つて來た。悪い奴が來やがつたなと腹で思つたのが顔に出たか、察しの早い菊坊は、急に低聲になつて。

「兄さん番兵になつてる時は口を利いちや不可ないの？」恁う言は

れると嫌な顔を見せたのが可愛想にもなつた、

「うゝん、そんな事は無いけど」

「そんなら宜いけど妾、兄さんが嫌な顔をするから……」

「でも、お前素頓狂な聲を出して、兄さんなんて第一見つともないからさ」

「どうせ見つともないでせうよ、妾のやうなお多福ぢやね」

「馬鹿ッ。何を言つてるんだい？ 一体こんな所を何所へ行つたんだい？」

「直ぐ、あの前の仕立屋さんへ。妓さんの羽織を頼みに」と斜掛け前の露路を指す、往來の人々が怪訝な顔で見送り見顧りする、聊か

具合が悪いと思つて居る矢先止せば好いのお秋の奴め三十面の好い年を爲ながら、所もあらうに「嘘よ、貴郎に會いにですよ、お樂み、妾はお先へ……」なんかんと大きな聲で擲擄半分に怒鳴りくさる。私は恐るには恐れず弱りながら邊りを見廻すと、之れはしたり！ 衛兵の詰所に居た私の戦友五六人何時の間にか此の態體を見付けてドヤ／＼と出て来て門の中から或者は鼻の下へ二本の指を列べて「此の二本棒奴」と言ひ、或者は自分の口の前を手で煽つてアハ、と笑つて見せ、或者は小指を出して「レコか？」と聞く始末に私たる者面喰ふ事一通りでない。すると菊坊も目慧く之れを見付けて道に極りが悪さう周章で「それぢや、兄さん左様なら」も極低聲

二八〇
で小腰をちよいと屈めると逃げるやうに立去つた。之れを眺めた一同は一度に哄と笑ひやがつた。――

それでも之れで噫と爲たが、人間と云ふものは爲す事もなく仄然と突立つて居る位馬鹿々々しく思ふものはない、寒風に吹かれて石畳の上に何爲るでなし何思ふでなし、たゞ立つて居る其の事が役目なのだから始末が悪い、それも敵が來るとか或は何かの事件を警戒して居るとでも云ふのなら又氣の持ちやうも違うだらうが、晝日中の日本橋だ、實際の事を言ふと歩哨の必要なんかあつたものでないのは知れた事だがお役目だから仕方がない、「こゝは御國の何百里離れて滿洲赤い」と出鱈目の軍歌を歌ふ茶臼公の群が原鐵回漕店

の横町から七八人、芋を片手に嚙るの、餡チョコを嘗るの棒切れを持つたのが何所へ行くのか、今し私の前へ差蒐つた。此の時止せばよかつたが兒共の好きな私は無聊紛れに「おいこらッ」と笑ひながら言つて見せた、之れが又もや歩哨御難の因を成したのだから迂かり小兒には揶揄へない、私に「おい、こら」と言はれた紺緋の茶目公は私の顔を見ると一問ばかり飛び退いて、

「なつちやんでい番兵ッ」大きな可愛い目を睜つて言ふ。と、連れの腕白達も之れに氣を得たものか。

「番兵の癖に威張つて居やがらア」

恚うなると私は猶も揶揄つて見たくもある

「そんな事を言ふと射つぞ」と銃を構えて叱つて見せるが私の顔面
神經は矢張り笑顔を見せずには居ない。

「射てるもんかい、弾なんか入つても居ないのに」と一人が言へば
「劔だつて平時は切れや爲ないんだよ」

何から何まで知つて居やがる。

「切るぞツ」と今度は劔に手を掛けると

「は、い、あいだ、切れるもんなら切つて見ろい」と一人の凸坊は、
べつかんこを爲る、恚うなると私が擲擲うのではなくて反對に兒共
達に擲擲はれて居るんだ、いくら兒共でも多勢に一人では關はない
「兵隊ツしつけぬのい」

「前へおいッ」

「此所まで来い、來られるかい？」

「番兵、其所を動けねえだらう」

と勝手な悪態を付き出した、歩哨が哨舎から遠く離れられない事ま
で知つて居やがる、あ、止しや好かつたと氣が付いたが既う遅い、
茶目逢は好い遊び道具を見付けたやうに却々悪態は止めればこそ、
恚うなれば嘔噂付けて感嚇すに如かずと今度は本到に恐い顔を爲て
「承知しないぞツ」と大喝一聲した時は道に兒共達吃驚したやうだ
つたが一人の腕白は感嚇と見透したか。

「あ、兵隊怒つた、怒つた、お前は怒ると恐いよオ閻魔の鹽辛だ」

之れに勢付いて茶目達は又も悪口攻撃の開始だ、するとツイ私も笑つて終うので茶目公益圖に乗り出す。と、急ち一人の茶目公濠端まで馳出すと見る間に、濠端の揚場に積んだ土の塊を掴んで來かと思ふと。

「攻撃ツ」と私に向つて打投げにかゝる。

急ち茶目軍は我も我もと土塊を掴んで來ては私の攻撃だ、これには道の私も閉口だ。

「そんな事を爲ると學校へ行つて先生に言ひ付けるよ」と言へば「へいだ、先生を知つてるかい？」

「學校を知りもしないで！」と來る、手が付けられない、土塊は私

の前後左右に炸裂する、哨舎の羽目へ當る、時折往來を通る人々が見るに見兼ねてか、「お止しお止し」と手を振る位は爲て來れるが茶目達何で言ふ事を聞くものか、

「ほーら、僕のは靴へ當つたせ」なんかと喜んで居る。所へ運悪くも戦友の吉田め煙草を買ひに門外へ出て來て此の有様を見ると、先刻の菊坊一件の岡焼でいもあるのか、茶目達に向つて。

「好いよ、あの兵隊をうんと窘めてお遣りよ」と冗談ながら意地を付けて行つて了やがった。

「僕のは四十七珊だ」と大きな塊を投げ付ける。これには道の私も怎うする事も出來ない、恚うなれば謝るより外道はない。

「小父さんが悪かつた、御免だ御免だ」と哀訴に及ぶが兒共達承知するものか。

「やー、兵隊、謝しやがる弱虫めッ」

と猶も攻撃の手は緩めない、哨舎の附近ば土が散亂して見つともないこと。

歸つて來た吉田は衛兵所へ戻ると私が兒共に窘められて居るのを報告したものと見えて、戦友達も人が悪い入れ代り立ち代り此の光景を奥から眺めて「やーい」と言はんばかりに喜んで居た。併し、兒共の攻撃が余りに辛かつた爲めか之れを見た衛兵司令の軍曹殿が出て來て、恐ろしい見幕で先づ茶目達を嘔辱り付けた。それが感嚇

と見えない程猛烈な見幕であつたので兒共達は退却した。

「玉村ッ」と今度は其の顔を私に向けた。

「はいッ」

「馬鹿ッ兒共なんかには擲擲うんぢやないッ見つともないぢやないかー」、それでも顔に馬鹿々々しさの笑ひを浮べて――。

「はいッ」で事は落着に及んだが、軍曹が奥へ引込むと以前の茶目達又やつて來て

「やーい、番兵叱られやがつたらう」

「なつちよこ無いのよ、はいッだつてよ」

「こゝで口を利用しては又も先刻のやうな攻撃を受けるのが厄介さに

苦虫を噛み殺したやうな顔構で知らん顔をして居る。

「いやーい、濟ますない、番兵ツ」

恚うなると全く兒共達に擲擲はれて居る。

あゝ、女子と小人でなくて兒共は養ひ難しだネ、

巡察將校

——巡察難で臭名知れ渡り——

「焼いたお芋と沸したお芋、どちらのお芋が美味かるオ、どちらのお尻が臭アかるオ、ドン／＼か。あゝ酔つた酔つたイ」と、森山の奴は飲んだくれると必然これだ。苟も國家の軍人たるものが、

態裁の悪い事此の上なした。帽子は阿彌陀で後頭に乗つたやけ、劔帯は縮んで、劔がお尻の上で踊つて居る始末、洋袴は下へ擦下けて、釦は先刻はずしたまゝ、金時が火事見舞にでも來たやうに眞赤になつた顔に、眼は何を見て居るやら薩張解らず、私に身体を半分預けて、晝日中の淺草の馬道を、どん／＼節を呶鳴て歩くのが私の戦友森山二等卒だから堪らない。今日の外出を私の親戚に當る北の廓の或る樓へ、久濶御無沙汰で出蒐ける、御馳走酒で森山は此の始末、飲むと困るとは知りながら飲ませたのは私の罪、大体なら私一人でお先へ御免と言ひ度い所だが、右の譯柄で爾うは行かず、それこそ仕方なく、此所までは連れて來たもの、此の態裁くでは

付添つきそいにある私わたしの氣きの揉もめる事こと一通りひととほでない。

二九〇

「貴郎あなたのお家は風上かざかみよ、妾わたしの家うちは風下かざしもよ貴郎あなたのお家うちで屁へをたれりや妾わたしの家うちまで臭におつてよ……」と謳うたうに事ことを代かへて大變たいへんな唄うたを歌うたうもんだ。道往みちゆく人も街まちの人も皆みな呆あきれて見みるぢやないか、飲のんだくれた森もり山やまは關かまうまいが私わたしの極きまり悪わるさつたらない。

「おい、森山もりやま止とせよ、おいッたら、乃公それは此所こゝへ置おいて歸かへるよ」

「置いて歸かへる？ お歸かへりなさい。歸かへれるものならお歸かへりなさい。わしや怎どうしても、チャチャン／＼かね」と愈い始はじめ末まつに卒をへない。

「確しつり、爲しろよ、二合ごうや三合ごうの酒さけに」

「飲のんだ酒さけなら醉よひもせう。春はるの夜寒よさむに酒さけ一つたべ過すし、武家ぶけの三みつ

指さしチン／＼つてのがあるな。をい、色男いろおとこッ」恚かうなると怒おこるには怒おこれず、泣なくには泣なかれず、然しかも生醉なまよひほし本性ほんしやう違たがはずで、兎ともすると馬道うまみちを右みぎに外それて、列れいの危けん險くわん區域くわんに侵しん入にんしやうとする。

「おい、巡察じゆんさつにでも見付みつけかつたら怎どうするんだい？」と虫むしが知しらすか、急きうに心配しんぱいになつた私わたしが四方しほうへ氣きを配くばりながら、私わたしに半身はんしん押おし掛かけた森山もりやまの体からだを搖ゆり上げて、姿勢しせきを直なさせやうと爲しながら偶ふと氣きが付ついた時は既すでに遅おそかつた、これは又また人が悪わるいのか自分じぶん達たちが悪わるいのか運うんが悪い、所ところもあらうに米久よねきうの横町よこちやうから出でて來きたのは、赤あかい櫛たすきを肩かたから下さげて、二名ふたりの武裝ぶさうの兵卒へいそつを隨したがへた巡察じゆんさつ將校しょうがうである。

併しも、私等わたしたちの距離きよりは僅わずかかに三米さんめい突いばかり、吃驚びっくりした私わたしは周章しゆぢやうで舉きよ

手の敬禮はしたものの、蒭蕪のやうになつた森山は醉眼朦朧、巡察將校に氣が付いて敬禮した時は、既に巡察が怪からん奴だと云はぬばかりの御面相で私達の所へ寄つて來た時だつた、しかも森山は帽子が阿彌陀で敬禮の拍子に後頭から這つて地面へ落した圖の悪さ、よろ／＼と蹣跚けながらに拾ひ上やうとした時、巡察は止れつと二人を睨み付けた。

「はッ」と不動の姿勢は取つた。二人は萬事休矣だ。

「軍隊手帖を出せッ」と云つた巡察將校はと見れば、未だ若い新品の少尉だ。それも聯隊違いの第三聯隊の肩章がある。二人は恐る／＼軍隊手帖を差出すと應て自分の手帖へ悉く二人の所屬隊から

官姓名悉く記入に及んで、偕て、訊問とお出なすつた。

「お前達は何所へ行つた？」と、これは當然聞かれる問題であるし聞かれたつて疚しいとは思はないから私は

「京町二丁目にあります私の親戚の宅へ、參りました」

「お前は？」と今度は森山に聞く、森山は返事の出來ないやうに酔つて居るが、道がに恐いと見えて。

「わ、わ、私はヒエツ」と半分返事しかけるが、嘖噎になつて、足元はよろ／＼。見るに見兼ねて巡察は。

「一緒か？」と云ふ、私は茲充分の辨解を要する時と

「はッ爾うであります。私の親戚が京町で貸座敷を爲て居りますの

で、無沙汰の詫びがてら出蒐けたのであります。森山は私が連れて行つたのであります」と云ふと

「何に？ 親戚に貸座敷、馬鹿なア」と来た、巡察の怪訝な顔つたらない。併も私を蔑むやうに其の「馬鹿なア」と言つた。案ずるに「貸座敷を親戚だと云へば俺が許すかと思つて居るな」と云ふ巡察の顔だ。恚うなると私は自分の身分柄を悉く述べ立てる必要があると思つたので。

「はい。私の家は新橋で藝妓屋を爲て居りまして、私の母の姪、私とは従妹弟が京屋の家に居ますのであります」と言はないでも言い事まで言つて終つた。すると巡察將校始めて合點したと云ふ面持

で。

「うーん、爾うか」と頷いて見せたが、之れだけでは放免にはならない。

「一体、此の態は怎うしたんだ？」と来る。四面には物見高い奴等が黒山のやうだ、武装の兵卒之れに漸く氣が付いて。

「立つんぢやないッ」茲に於て私は御馳走酒の一仕始終を報告に及び、森山の不能裁を詫びると、何事ぞ、其の詫びて居る真最中、森山の奴めゲゲーツと、到々小間物屋を開業して了つた。巡察將校手巾で鼻を抑へたまゝ、「こりや不可ん……出来る事なら何所かで休んで歸營しろ、未だ時間はあるだらう」

と道に優しく言つて「兎に角氣を付けて歸れ」で到々行つて終つた。それでも遅刻もせず歸營したが、其の日巡察に咎められた事は届けすには居られない。と言つて届けるのは自分で大目玉を頂戴に參上するやうなものだ、思へば人間生れて恁麼厄介な戰友を持つべからず、森山が怎うやら酔が醒めたので愈々班長殿へ委細言上奉りに行かうとなつたが、散々私を弱らせた揚句見咎められないでも好い巡察なんか科められるやうな事を仕出來かした森山の奴は今になつて辛くお届けを恐がつて、却つて、私に「怎うしやう？」と聞く始末だ「そりや矢張届けなきや後になつて知れるにや極つて居るんだから其の時こそ大變だ」と二人は到々覺悟を極めて届ける事に

爲たが怎うせ叱られるなら出來るだけ叱言の時間の短かい方が好いと云ふので夜の點呼の廿分ばかり前になつて漸く班長室の扉を叩いた。「入れ」の聲と諸共班長の前へ不動の姿勢を取つたのは二人であつた。

「森山は本日淺草で巡察將校に咎められましたッ」と、それでも道に森山は私に氣の毒だと思つたか、自分が悪くて巡察に科められた事を委細言上に及んだ、そして二人は神妙に班長の叱言を待つた恰度お灸を据えられる兒が、あの暑さを今か今かと待つやうな嫌な氣持ちで――。

しかし、不思議にも班長は大して叱言を言はなかつたばかりか、

微笑しながら。

「馬鹿だなア女が居たんで鼻の下を長くして飲んだんだろう、氣を付けろよ。今後は」で、後は「宜し」で放免となつた、先づ助かつたと胸撫せ下して内務班へ歸つて来て一喫するか爲ないうち今班長の方から森山に來ひとある、森山は底氣味悪く出蒐けると班長は班の報告簿を森山に渡した、これを週番士官殿の所へ持つて行けとある、これこそ、今日の始末を班から中隊への報告である、森山は恐怖吃驚で中隊事務室の周番將校の手許へ届けたが週番の將校は又そんな報告があらうとは知らないものか「其所へ置いて行け」と云ふ、森山は占めたとばかり班長室へ取つて返して「置いて参りま

した」班長は森山を顧みて「報告簿は怎うした？」「はい、置いて行けと言はれましたから置いて参りました」「うん、爾うか、週番士官殿は何もお前に言はれなかつたか？」「はい、何にも申されません」「宜し」これで其の夜はそれなり覺で點呼の時には週番將校は何にも言はずに事が濟んだ。併し、翌日になると二人は一應中隊事務室へ呼ばれて取調べられた揚句「本中隊の恥になる事だ、今度充分注意すべし」と懇々叱られたが下士なぞが叱るのと異つて道に將校が叱りやうは要領も宜く言葉も口汚く罵るやうな事はしなかつた。私は叱られながら平時上等兵や下士が言ふ叱言と比較研究を爲て見て、成程將校となると年齢は若い下士なぞより余程偉い……

三〇〇
其の夜の點呼の時である、中隊附の曹長殿が各班を廻つて歩いた
そして曰く。

「廻報を達す。近衛歩兵第△聯隊第△△中隊陸軍歩兵二等率玉村梅
吉及び歩兵二等率森山直次郎の兩名は大正△年△月△日午後二時頃
泥酔の上淺草區馬道通に於て、高聲放歌亂舞し往來に嘔吐し、服装
を濫りたるを巡察士官に認められ譴責されたり、右廻報に附す」と
觸れて廻つた。これで私達二人の恥は我が聯隊は愚か衛戍地内の各
聯隊悉くへ廣まつて終つた譯である、馬鹿々々しいにも程がある
戦友を御馳走に連れて行つた揚句の果が散々世話を焼かされて、そ
れで泥酔して往來に嘔吐したまで言はれ、ば世話はない……と言つ

た所で、二等率の悲しさ、私は只附添人であつたばかりだとは何所
へ辨解して宜いやら解らず、他の中隊の奴等からは藝妓屋の伴だか
ら有さうな事だ位にしか思はれない。今日も今日とて戸山原の演習
の休みに他の斑の奴から散々な目に會つた、いくら辨解しても聞か
れ、ばこそ「おい回報の色男」なんかと余り好い色男にされな
つた。

抑も、巡察と謂ふは衛戍地内の各聯隊から少中尉の將校が交代で
日曜日の外出日を市内の盛場や兵隊が好んで行きさうな場所へ監
督の眼を配りに行くのだ。それがまた巡察と來ては兵士の落度を見
付けるのが役目とあつて、其の厳しいたら如何程職務に忠實な爲め

か知らないが、帽子が曲つて居ても釦が一つ外れても、冬の寒さに知らず識らず洋袴の衣囊へ手でも突込んだでも一度此の巡察に認められたが最後軍隊手帖のお調べにあつて、其れが直ちに回報となつて、各聯隊へ披露に及ばれるのだから難儀な話である。單に巡察と云つても之ればかりではない、勤務中にも勤務の巡察が時々御來臨に相成つて小面倒臭い質問などをされる歩哨に立つて居てさへ時折は此の巡察難に遭遇する、實に兵隊さんには赤い襷は禁物である。併し私は此の巡察難の一件で私の名前が東京中の各聯隊、數萬の兵隊に知れ渡つた事を痛快にも思つた、たゞ驍名でなく武名でなく、嘔を吐いた臭名であつた事を言憾とする。

精 勤 章

——狡猾の功妙と江戸兒だい——

軍服の右袖、二の腕 赤い山形の章が付いて居る、それが精勤章だ。

其の精勤章が私の腕に付いたから不思議ではありますまいか、何も、御褒めに預つて置きながら、それを笑ふのではないが、兎にも角にも一冊の本にでも爲やうと云ふ位、馬鹿々々しい事を爲た——全部ではないにしろ、大部分は失策と狡猾、軍隊で云ふ要領の記録なのに——私が克く勤めた精勤章を頂戴したのだから恐縮せざるを

得ない。

三〇四

所で、此の精勤章と云つても、強ち精勤を擡でたと云ふのでなくとも貰へるには貰へる、

つまり悪い事を爲す、何か屁のやうな些細な事でも中隊長なり將校になり彼は感心な奴だと云ふお目に止まつて、運が好ければ、此の精勤章が頂ける譯だ。海軍の善行章は一つに付き一日一錢の増俸が貰へるのださうだが陸軍には、そんな事はないが、之れを付けて居ると世間態が好い、同じ兵隊でも知らない人には偉さうに見える譯だ。私は今、自分の精勤章に就て物語らうとするのだが、自分ながら何だか極りが恥かしく、後目暗いやうな氣がしてならない、

私が、もう少し正直なら之れは中隊長へお返しするんだつたが——
古兵となつてからの三月の事である、彼岸近くだと云ふに夜中から降り出した雪は綿を千切つたやうな大雪で急ち積り出し、朝には既う六七寸にもなつて居た。營内の雪掻きは、各中隊々々で平常の掃除と同じに持ち場がある。朝の點呼の時に雪掻きが命せられた。私の班は勤務以外の者は悉く雪を掻き出した、私は例の如くに要領好く、班長なぞの視線を避けて、下士集會所の裏手へ入り込んだ。所が其所は誰が掻いたものか、可成りに廣い空地の雪が半分以上も綺麗に掻いてあつた。私は衣囊へ手を突込んで扉越しに、兵營の土手下に開展する街の雪景色を眺めて、別に雪を掻かうともせず

油を賣つて居た、今に皆が掻き終つた時分に出て行けば宜からうと
 狡滑此の上なしを極め込んで居る。可成り長い間、憊うして油を賣
 つて居たが、聽て無聊になつて來た、……その無聊紛れに脇へ置い
 た雪掻きを取直すと力も入れず、眞似事のやうに二掻き三掻き、其
 の邊の雪を掻き始めた。……其の時偶と佩劍の音が爲たので睥をあ
 げて見ると私の中隊附の故參少尉が何かの用で下士集會所へ來たの
 であらう、集會所の便所へ來て、裏手へ出て來たらしい。私は直ち
 に擧手注目をする。

「玉村か……」と言つた、莞爾爲ながら答禮して、併も其の邊の雪
 の掻いてある様を見ると其の儘集會所へ入つて了つた。

其の夜の學科の時になつた、其の少尉が教官である、講義を始め
 る前、先づ私を見付け出した、そして一同に向つて曰く。

「お前達は軍人である、軍人は爲る事に陰日向があつては居けない
 自分は今朝雪掻きの折に、本中隊にも恁麼感すべき兵率が居るかと思
 思つて非常に満足した、それは玉村梅吉である。玉村は誰も人の見
 ない、下士集會所の裏で誰一人一生懸命専心其の勤務に服し、可成
 廣い、彼所の雪を一人で掻いた、軍人は此の様でなくては不可ん
 と來た。過ちの功妙と云ふ事はあるが、狡滑の功妙と云ふ事は此の
 時の私の他にはあるまい。戦友の視線は悉く私に注かれる、私は
 穴へでも入り度い位だ、併し、私は平氣な顔を爲て居た。之れも私

が精勤章を貰つた一つの理由だと思つて居る。

三〇八

私は、初年兵を可愛がつた、之れは嘘偽の無い事實であつた、私は去年の古兵に窘められたかのと云つて今年の新兵に其の返報をしても何にもならない、所謂軍隊で謂ふ「申し送り」を爲ても何にもならない事を知つて居た。自分が新兵の時の経験でも解るが嫌に古兵面を爲て、威嚇しながら新兵を扱うより、恩を以て可愛がつて遣る方が自分の爲めに怎麼に親切にして呉れるか解らない、それで私は新兵に荒い言葉を掛けた事がない。

私の班の上等兵の一人は何所とかの甲種商業學校とかを卒業したとか爲ないとか云ふ男だが私達一緒に入營したが、中隊中では教育

のある方なので直ぐ上等兵候補となつて、私達が古兵になると同時に上等兵になつた男だが、上等兵中の一番左翼で皮肉な譬曲りである。併し、私とは同年兵ではあり、且、私の買収の奥の手に掛つて居るので班内で此の上等兵の相談相手は常に私である位私には頭を底くして居た、後一人の上等兵は藥學校を中途退學したと云ふ里で年配も猶豫して居たゞけに取つて居て、毒にも藥にならぬ好人物で問題にはならない。初年兵が泣くのは此の前者で姓を飯岡と云つた、古兵仲間の意地悪は、新兵時代に私と相棒だつた料理屋の伴の吉田と云ふ男で一等卒に成れなかつたので新兵に當り散す、新兵こそ好い面の皮である。

第一期検閲前で新兵の演習は激しい。今日しも新兵を引率して戸山原へ出蒐けた新兵係の小松少尉は地物應用の演習では古兵の補助が必要だつた、その補助役を仰せ付かつたのは譬曲りの飯岡上等兵を頭に底意地の悪い吉田と、其の他古兵仲間の二等卒が七名ばかり孰れも私の斑の者であつた。

其の日、私は衛兵勤務で行かなかつたので其の演習中怎麼事があつたかは知らないが、其の夜の點呼が終つて、これから寝るばかりと云ふ時になると、飯岡上等兵が吉田に何やら云つたのが機掛で、吉田はやをら寝そべつて居た寢臺から起き上ると、内務班の真中へ突立つて。

「初年兵集れッ」と怒鳴つた。新兵はと見れば言ひ合せたやうに不安と恐怖に襲はれたやうに、互に顔を合せたが、止むを得ない、吉田を前にして列んだ。之れを一渡り眺めた吉田は、突然。

「お前達は狡いぞッ、今日演習中小松少尉殿が誰か来ひと云つたのが聞えなかつたのか？ あんな雑務を古兵にさせて置いて、初年兵は知らん顔で飯を食つて居て好いのか、自分は少尉殿の命令で爲たのだが、少尉殿が自分を呼ぶ前「誰か来い」と云はれたのが、お前達には聞えなかつたか？」と怒鳴つた。飯岡上等兵は寢臺の上から之れに應援するやうに。

「今年の初年兵は狡いよ」と云つた。私は吉田の奴め又飯岡上等兵

のお先に使はれて新兵を窘めやがると思つたが未だ口を出すべきでないと思つたので沈黙して居た。すると吉田は、言葉を續けて

「あれが聞えなかつたのか？ 前川ッ」

と、列んだ右翼の新兵から聞き出した、

「はいッ、聞えました」

「それでは何故行かなかつた？」

「はいッ」

「はいでは解らん、怎うして行かなかつた？」

「誰か行くかと思ひまして」と切端詰つて最も悪い返事を爲て了つた、吉田は得たりとばかり。

「よし、爾う云ふ横着な奴だ。藤本ッお前には聞えなかつたか？」

「はいッ聞えましたッ私が悪うありました」

「悪かつた？ 馬鹿ッ悪いのは今始まつた事だもんか、謝まれば濟むと思つてやがる」

「木村ッお前は怎うか？」

「はいッ 私は聞きませんでした」聞えたと云へば具合が悪さうなので聞かなかつたと云つた。

「聞きませんか？ それは怎う云ふんだ、聞えなかつたのか？ 茫然して居て聞かなかつたのか？」

「はいッ、聞えなかつたのであります」

「お前は耳が悪いのか？ 横着な奴だッ」

と云ふかと思ふと、吉田は新兵木村の鼻柱をピシリツと指先で弾き上げた。木村は痛さに堪へたか眼から豆のやうな涙をハラ／＼と落して恨めしさうな視線を吉田に注いで居る。併し、吉田はそれには知らぬ顔で一同に向ひ、

「聞えなかつたものは手を舉げい」と言ひ放つた、新兵達は、今、聞えなかつたと云つて酷い目に會つた木村を見て居るので誰も手を上げるものはない。

「宜し、皆聞えたのだな！ 横着な奴等だ」と、吉田は如何なる懲罰を申付けるべきかを考へて居たやうだが「よし」と決心して

「お前達は各自、自分の整頓棚の下の靴や劔を皆床へ下せ」と命じた。新兵達は、自分達が懲罰されるべき仕度に取りかゝつたとしてそれが済むと新兵達は口々に

「下しましたッ」と言つた。

「よし、それちやお前達は其の整頓棚の下で、乃公が好しと云ふ迄不動の姿勢だ」と言つて、あはれ廿人足らずの新兵達は、高さ四尺ばかりの棚の下へ入つて、中腰の不動の姿勢を取らされた。

「木村ッ眼を動かしちや不可ん」てな事を寢臺の上に腰を下した吉田は怒鳴つて居る。身體を前へ「く」の字なりして、全身の重さを脹脛に托して棚の下に立つて居る、そんな事を五分も爲て居たら

堪つたものぢやない、額から油汗が出る、併し、吉田は却々止めさせる様子もない。私は新兵達が可愛さうになつた、乃は江戸兒氣質の任侠の然らしむる所であらうか、私は矢庭に

「吉田、もう好いちぢやないか、其の位やれば、初年兵が怎麼事を爲たのか知らないが」と言ひ出した、新兵達は恐らく地獄で佛と思つたであらう。

「何、今年の初年兵は狡いよ」と言つて今日は戸山原で演習の休憩中、小松少尉が辨當を途中の茶店へ置いてあるのを取りに行つて貰ふ爲めに「誰か来ひ」と云つた時、新兵達が誰も行かなかつた爲めに自分の傍に居た飯岡上等兵に取りに遣つた、その後で吉田が又何

かの使ひにやらされたのだと云ふ事だ、小松少尉は初年兵が辛いのを知つて居るので出来るだけ休ませやうと思つて、補助役で樂を爲て居た古兵を使つたのであらうが、初めに「誰か来い」と云つた時初年兵が行かなかつたのが此の祟りをなしたのだと知れた。

「併し、もう好いちぢやないか」と再び私が言つたが吉田は承知しなかつた。私は腹が立つたので急ち不動の姿勢を取つて居る初年兵達「初年兵休めッ」と號令を掛けた。しかし吉田が不可んと云つて頑張つて居るのを知つて居るので迂かり「休め」をやると後の祟りが恐いのか新兵却々休まない、私は再び

「初年兵、休めだッ」と呶鳴つた、すると一人二人棚の下を離れた

すると吉田は

「未だ休めぢやないぞッ」と呶鳴り返した。私は愈癢に觸つたので

「休めだッ」と又呶鳴ると、私は一人一人整頓棚の下から引張り出して遣つた。

吉田は怒つた。飯岡上等兵は険しい眸で私を睨んで居る、併し、他の古兵仲間には私に同情の眸を注いで居る、

「玉村ッ何だつて、そんな余計な事をするんだい、乃公に恥を搔かせる氣か？」と吉田は今度私に喰つて掛つて來た、慙うなると私は敗けて居ない。

「何をッ初年兵を窘めて何になるんだい馬鹿野郎ッ他人の頭の蠅を追ふ暇に自分の頭の蠅を追やがれッ」と呶鳴り付けてやつた。

愈々吉田と私の喧嘩だ、私は此の喧嘩なら爲ても好いと思つた。「俺が初年兵を窘めるつて？ 何時窘めた？」

「何を言やがるんだ、今も窘めてるぢやないか」と私は徹頭徹尾吉田を凹ましてやる。飯岡上等兵は吉田の顔を見て「やれやれ」と言はんばかりの顔である。しかし自分が出ると表沙汰になつた時損をすると思つて。飽く迄狡猾な飯岡奴私には何にも言はない。

「玉村ッ手前生意氣だを要領ばかり遣やがつて」と吉田は更めて喧嘩を賣るらしい。私は吉田となら毆合つても敗けないと思つて居る

それに止める者は大勢居る事を知つてゐるから擲るなら先へ擲つた方が利益だと突嗟の間に氣の付いた私は

「何をツ」と言ひざま飛鳥のやうに身を躍らして吉田に肉迫すると矢庭に吉田の腰骨をヤツと云ふ程蹴上げると同時に力一杯に突飛して置いて、續け様に拳を固めて頭と言はず顔と云はず滅茶々に殴り付けた。

不意を打たれた吉田はアツと云ふと寢臺に危く身を支えたが急ち鼻から血を流して。そして吉田も「何をツ」と私に抵抗しやうと爲た時は既に他の古兵達に遮ぎられて

「止せよ、止せよ」と止められて居た、勿論私と抑へられて居たが

私はこれで氣が濟んだので再び擲らうとは爲ないので直ぐに手に自由にされた、吉田は止める者があるので猶暴れた、殊に擲られた口惜さは却々納まらない、頻りに身悶へしながら私を罵つた。私は鼻血を出して駄々兒のやうに喚いて居る吉田を見ると可笑くなつたので

「うわ〜う〜だ」とベツカンコをして椰揄つて遣つた。

此の騒ぎを呆氣に取られて見て居た新兵達が漸く我に歸つた時は飯岡上等兵が尤もらしい顔をしながら、新兵達に

「お前達の爲めに、こんな騒ぎを惹起したのだから、吉田によく謝罪れ」なんかと言つて居た。新兵は仕方がないので一生懸命吉田に

謝罪つた。

其の裡に消燈の喇叭は鳴る、新兵達は僅かの懲罰で事が済み、吉田も其の儘泣き寝入りになつて了つた。

その翌朝になると「歩哨」の欄にも書き入れたやうに、洗面所で新兵達は一人一人私に町重な謝辭を述べた、そして水を酌んで呉れる者があれば、襯衣が濡れないやうに背後から抑へて呉る者がある。私は將校も及ばない程の待遇をされる。斯くして新兵達は私に親しみ兄弟し敬つた。

此の事が一日二日の間に古兵の誰かの口から班長に聞え、又誰かの口から新兵係の小松少尉にも知れた。

其の夜、飯岡上等兵は班長室へ呼ばれた。班長殿の暇潰し道具となつて散々油を絞られた。

私は其の翌日小松少尉は「お前喧嘩を爲たさうだな」と云はれた。その時の少尉の顔には「好く初年を庇つて呉れたナ」と云ふお禮の言葉が其の微笑を含んだ眸から讀む事が出来た。

私の精勤章は恁麼ことから割り出されたのだと思つて居る。

俸給

——兵隊で居ながら稼いで蓄めた人もある——

第五内務班で俸給を渡すから集れ——

と周番上等兵が中隊内を觸れて廻る、これが十日目には必ず来る俸給日である。上は曹長から下は二等卒まで夫れ／＼階級に應じて頂戴する一等卒も二等卒も一日の俸給が五錢二厘、之れが十日目で大枚五十二錢となるのだ、それを印形持參で内務班に集まると、班の一角に卓を持ち出した中隊付の曹長殿は經理官から受取つた紙幣に銀貨に銅貨を、函に入れて來ると順次受取りに出る、そして帳簿に印を押すと云ふ段取りになるのだが、抑も之の一日五錢二厘と云ふ俸給は何所から割り出したか知らないが、煙草を喫う者など軍隊用の「ほまれ」を買つたら残りは一厘、酒保の焼芋一本さへ買へない。家で貰ふお小遣も兵隊に行つて居るとなるとお袋も同情してか言ひ

なり次第に呉れるのは有難いが、お金はあつても遊ぶ暇はなしで遣ひもしないが外出する小遣なぞ月には十五圓内外は怎うしても要つた。所が中隊の中には此の五錢二厘を小工面に貯蓄した者もあつた。彼の名を村瀬と云つて福島縣の百姓だが――二年間暮した間に百三十圓と何十錢とか蓄めて居たとの事であつた。彼が一日五錢二厘を一文も費はずに居たとしても二年では三十八圓に足らないのに怎うしてこんな多額の金を蓄めて居たか？ 彼は勿論水呑百姓で彼が兵役にあると云ふ事は彼の家庭から云へば大苦痛で、彼は老耄けた母親を養はねばならないのである、私のやうに母親からお小遣を貰ふのと譯が異つて一厘でも母親に與へねばならないのださう

だ。それで彼は軍隊へ入るので村の村長が大變に氣の毒がつて、二年間老婆を預つて呉れる事になり老婆は村の青年會から補助を受けて居るのだとの事、彼は家に居るより軍隊に居る方が、どんなに自分としては氣樂だか知れないと云ひ續けて居た、それを思ふと私なぞは全く罰當りだ。村瀬は此の軍隊の俸給に一厘でも手を付けたことがなく、直ぐに郵便局へ之れを全部貯金した。そして怎うしても買はねばならぬ撒紙なそを買ふのは皆隊内で稼いだ。彼は自分が貧俸である事を比較的金廻りの好い戦友などに話して、其の洗濯物なぞを請合つて、夫れで報酬を得た。多くの戦友達が喜び勇んで外出する日曜にも彼は洗濯場で戦友の襯衣や袴衣をゴシ／＼やつて居た

村瀬 五錢出すが乃公の銃の手入れを爲て置いて呉れないか。なぞと内證で頼む者なぞも大勢居た靴を磨いたりして稼ぎもした、彼は我々の三倍も四倍も働いて一意専心金を貯めて居た。そして彼はよく「軍隊に居る間に百二十三十圓蓄めて、それで故郷へ歸つたら小さな商賣でも始めてお袋に少しは樂をさせて遣るんだ」と云ひ云ひした。戦友達は彼が金を貯める事を嘲る者は一人もなかつた。所が村瀬が古兵になつてからの或る日端なくも此の事が中隊付の中村中尉に知れた。中尉は村瀬が慙うした親孝行の心で金を蓄めるとは知らず單に守錢奴であると思ひ違ひ、殊に戦友の武器の手入や、洗濯なぞまで爲ると聞いて軍隊の風紀に關るばかりでなく、戦友を怠け

者にするのみか、そんなに労働をする事は村瀬自身の成績にも關する事だからと云ふので、村瀬を周番將校室へ呼んで之れを詰つた。村瀬は此の時男泣きに泣き出した、そして家が貧棒である事から一人の母親に孝行したいばかりに恚麼恥な真似をするんだと累陳して泣いた。中尉は非常に氣の毒に思つて其の翌日から彼を從卒にして何かと心付けを爲てやつた。此の事は急ち中隊長に知れ次いで將校集會所の話題となつて聯隊の將校で誰知らない者はなくなつた。其の結果彼れは常に人々から心付けを貰つた。戰友間でも小遣が無くなつた時彼が貯蓄した金から幾何かを借りて、返す時に多額の禮をする者なぞもあつた。

村瀬は除隊する時中村中尉から十圓と他の將校達から十圓と貰つた。そして自分の蓄めた百三十圓とを合せて百五十圓の金を握つた。彼は除隊すると母親を東京へ呼寄せて、今では牛込の山吹町で八百屋を始め一生懸命稼いで居るとの事、中村中尉の宅へも出入をして「お蔭様で」と云ふ言葉を忘れないさうである。私は軍隊の俸給で思ひ出した一挿話として、此所へ書き添へて置く。

行軍

行軍も要領次第で郊外散歩

鬱陶しい梅雨が上ると灼熱した太陽が下界を照し始める、夏服に

なつた兵隊さんは毎日喘ぐばかり、それなのに軍隊は教練演習の手は少しも緩めて呉れない、夏の真盛りとなれば日中はお休みだが今日此頃のお天気では一向お關ひなした。此の時に當つて我が聯隊は習志野に向つて行軍と云ふお觸れを出した。をやくと誰も彼も恐れ呆れた。要領の好い奴は早速班長室へ飛び込んで診断を受け度いと申し出る。型の如く醫務室へ行つて、一年志願兵の醫學士殿、三等軍醫より本職だとあつて代診を承はり脈博を見て、眼の皮を剥いてベツカンゴをして、舌を出させて馬鹿釣た。をする、そして聴診器を一廻りさせて、

「怎うだ練兵は出来るか？」と聞く

「はい、怎うも」と云へば乃は志願兵だ同情があつて診断簿へ朱い印形で「練兵休」と来る。他の者等が汗を流して喘いで居る間に自分分は風通しの好い三階の内務班で床の上で講談の豆本でも讀んで居やうと云ふ寸法だが、七屋釜敷い軍醫殿となると

「何所も悪くは無いちやないか」と、いけ好かない睨みやうをして黒い印形で「就業」と云ふのが診断簿へ押されると厭が應でも練兵へは出なけりやならない。所が行軍となれば少しでも体が悪ければ連れては行けないとあつて「練兵休」を呉れる分量が大分多い、之れを見込んで出蒐ける要領屋が一中队に六人七人もある、お多分に漏れずの格で私も……と云つて満更假病では決してない、小便が黄

色になつて頭痛が爲て困るので若しも行軍中に激しくでもなられたら大變と多少は容態を誇張はしたが、兎に角出發の日の前日の朝、醫務室へ診断を受けに出蒐けると、運悪く大隊の軍醫長とも云ふべき一等軍醫殿

「何に、これ位行軍すれば直つちまう」

と、情なや「就業」と來た、豫て仲の悪くない班長は何とかして私を隊へ残さうとしたらしかつたが要領屋か或は眞劔に病氣なのかは知らないが私の中隊から多くの殘留者が出たので私は到々行く事になつて了つた。

其の日は恐ろしく準備に忙がしく、背囊には悉く所定の組入品

を組入れたたり、雜囊、水筒、外套や代靴まで一切用意に及んだが、借て考へ直して見れば、苦しいながら行軍へ行つて見たいやうな氣にもなる。田や畑や村や村人や、町や山などが何となく懐しいものゝやうにも思はれた、隊内の單調と趣味の乾燥が聽て私に慙うした旅情を唆るのだと思はれた。

午前四時半……曉の星は降るやうに輝いて居る。清々しい氣が面を拂ふ、營庭に列んだ一箇聯隊の貔貅は正さに習志野に向つて出發するのだ、定刻となると隊の中央に馬上の聯隊長は勵聲一番

「我が聯隊は之れより習志野に向つて行軍をする、第一大隊より出發ッ」と嘯鳴る、次いで各大隊では大隊長の司揮に従つて、彼方で

も此方でも「右向け右」や「左向け左」續いて「前へ——オツ」で營門を出る時には進軍喇叭がチチチタタ……

歩調は揃ふ、自分ながら勇ましいと思ふ。間もなく「歩調止」となつてテク〜歩きだ、街は静かに睡むつて居る——

白々明けの兩國橋を渡れば川風が涼しく面を吹いて、纜つた船には朝の篝火が繪のやうな隅田川に燃えて居る。何とも云へない快い氣持ちだ。

東京の街を離れると、そろ〜太陽が東の雲間から顔を出した、すると今まで左程に苦にならなかつた背囊が段々重くなつて、帽子の廻りには汗の滴が……廳で頬を傳つて顔が赫々と火照り出した。

もう息使ひがせはしくなつて來た。

國府臺まで來た時は、太陽は遠慮なく灼熱した、蒸れるやうな土いきれが全身に傳はつて汗は瀧津瀬と流れる、背囊の負皮は既う肩の骨へ食込みさうに痛い、それも其の筈、彈藥やら干飯、靴下、武器手入布、糸針、着換の襯衣や袴下、それに靴から圓匙外套まで兵隊一人前の處帶道具一式を背囊へ入れたり締め付けて居るので其の重量は七八貫もあらう、それに銃と劔とを合せたら優に一人擔いで歩くだけの重さは充分ある。頑丈に出來た体でも好い加減樂ではない、搗て、加へて、二三日前から小便が黄色くなつた一件で確かに熱があるに相違ないのだ、診斷が就業で仕方なしに出て來た

ものゝ、恚うなると我慢にも伍列の中へ交つては到底歩けさうもない、と云つて今更之れを言ひ出した所で安直に御聞き届けになつて呉れさうにもない。厭だと思ふと堪らなく行軍が辛くなつて来た、怎うかして楽になる工夫はないか？ と、こればかりを考へながら引摺るやうな歩調で歩いて行が、怎うして行軍には遠慮がない、泣きさうな顔が喘ぎながらフウ〜と歩く、私が恚うなると戦友等も誰一人口を利く者はない、いづれも汗みどろな顔に塵を浴びて喘いで居る、フウ〜云ふ息切が歩調と俱に進んで行く。國府臺の町を離れて一里も来たかと思ふと漸くのこと休憩中食の號令が全軍を蘇えらせた。

青草の原に、木立が影を作る中を褐色の國道が蜿々と延びて居る、其所に休憩した我々は銃を組み、背囊を下すと汗に滲んだ脊中が木影の涼風に好い氣持だ、併し日に照らされた褐色の道路に、睥を遣ると「あゝ、又、あすこをテク〜か」と思ふと堪らなく厭だ。

飯盒を開くと、佃煮のお菜、それに梅干が汚らしく入てある、梅干の嫌ひな私は一睥見ると奥齒に虫唾が走つた、それでも飯べすには居られない、戦友と話しながら食ひ出したが、由來私は梅干を食べると嘔氣を催すのが癖だ、私は梅干が付かない所を選つて、佃煮で飯を食へ終つたが怎うも胸がムカつく、いつそ吐いて了へば好い

と私は思つた、そうすれば之れを理由として落伍が出来ると私は遂に太々敷い考を起して了つた。

私は嘔吐う、そして落伍しやうと愈々決心して了つた、それは私は酒を飲み過ぎた時など自分で指を口の中へ突込んで搔き廻せば何時でも吐ける事を知つて居るので、嘔くと云ふ事が私には左程困難な藝當ではなかつたからであつた。

私は班長が直ぐ私の傍に居たのを幸ひに直ぐ此の藝當を演じた、再三試みると今食べたものを悉く立派に吐き出した、私が斯くして小間物見世を開業すると戦友の誰被は急ち私の脊中を撫つて、「怎うしたか？」と口々に訊ねた。班長は此の態を見ると私の傍へ寄つて

来た、そして苦しさうに呻いて居る私を見ると

「お前熱さに當てられたなア」と言つた。占めたツ之れで願望成就私は誠にやかに

「はい、先刻から怎うも苦しくて……」

と言ふと、中隊長も直ぐに之れを聞いた、そして私の容態を聞いた。日射病を恐れる軍隊——それは毎年夏の行軍の一難事として新聞の材料になるからだ——中隊長は心配さうに

「お前歩けるか？」私は恐縮した。悪い事をしちやたなと後悔したが既う遅い、毒を食つたら皿までだと太々しくも思つたが、それでは余り義理が悪いから

「はい、いえ直きに癒ります、少し落ち付けば……」と云つた。

それで到々私は願望通り落伍、極まつた。

「小山志願兵と一緒に後から来ひ」と来た、占め何から何までお詔向きだ、小山志願兵と云へば志願兵仲間のズベラの大將である、さては奴さんも要領で落伍したらしい、好い合棒で幸せ此の上なした

。その儘隊は出發、私と小山志願兵は隊の後から暢氣に……と見れば小山志願兵神妙らしい顔をして居るが蛇の道は蛇で見える者が見れば直ぐ解る「小山志願兵め私の顔を見ると「お前もか」と云ふ顔付だ。二人は重い背囊を炊事班の車に乗せて了つた、銃だけ舁いた郊

外散歩の態だ。隊が遠く離れる迄は二人も無言に神妙に病人になつて居たが愈隊が遠のいたとなると、先づ小山志願兵が口を切る。

「玉村狡い奴だなア」

「貴郎だつて」

「馬鹿言ふない、乃公は本到に頭が痛いんだ」

「はア爾うですか、それでもねエ」

「何言やがる、お前は怎うしたんだ？」

「熱さに當てられて嘔吐たんです……指で。」

「爾う云ふ奴だ」

「恁う云ふ奴だ！」

二人は一度に噴笑した。ハハハ、、、ア

「戯談ぢやない、隊から見えるぞ」

「既う大丈夫……時に小山さんお肚が減いちやつた。何か食べたい」

「贅澤お言ひでない、病人が」

「もう御本腹です」

「そんなら列へお歸り」

「又吐きます」

「指でかい？」

「手品ぢやあるまいし」

「玉サン、乃公は咽が渴いた、サイダが飲みたい」と今度は志願兵

が云ふ、私は賺かさず、

「贅澤お言ひでない、病人が」

「もう御本腹だ」

「そんなら列へお歸り」

「又頭が痛む」

「要領でかい？」

「手品ぢやあるまいし」

二人は又哄と笑つた。そして二人は何時か隊を先へ遣つて了つて、

道傍の掛茶屋に腰を据えて居た。

「お女將さん、ビールがあるね、何だか温さうだな」と、もう志願

兵は泰平樂だ道の私も聊か呆れた。

「頭の痛い人にはビールは毒です」と云ふと志願兵平氣なもので。

「薬です。……お女将さん緒寸冷して。」

「はいく直きに。お女将は奥の井戸へビールを冷しに行く。私は

心配だ」

「小山さん戯談ちやありませんせ、遅れちまいますせ」

「怎うせ遅れたんぢやないか……隊で心配なら誰か向ひに来るよ」

「恁麼調子で二人は夏蜜柑でビールを飲んで、私は蜜パンを腹一杯

詰め込んで」

「さア出蒐けやうかね」と立上つた時は一時間も経過して居た。夏

日中ながら午後からは日が蔭つたり照つたりする。二人は快い氣持ちに……帽子の後に手巾の日蔽を作つて銃を天貧棒擔ぎにして、人の通らぬ往還を、贅話が嵩じて惚氣合に夢中で歩く、……果ては鼻唄まで唄ひ出す始末だ。

五十分間歩いて十分休む行軍を、後から鼻唄まぢりて歩いた足が割合に抄取つたと見えて、隊より四十分位遅れたばかりで習志野の宿舎に着いた。日はとつぷり暮れて炊事班の忙がしき、兵隊は腹ペコで之れを待ち飽んで居たが、私等二人は途中で大福でも今川焼でも立喰を續けて來たお影様で、軍隊の御飯なぞ慾しくはない二人は直ちに班長から

「具合は怎うか？」と聞かれる、二人は道に氣が咎めたので二人が二人共。

「非常に疲れましたが、具合は宜くなりました」と答へた。班長は安心したやうに、

「それちや、明日から演習は出来るな」

「はい出来ると思ひます」

班長は之れを直ちに中隊長へ報告した、殊に「二人共明日から演習へ出られるさうであります」と云つたのが馬鹿に正直らしく聞えた中隊長も安心したやうに

「そりや好かつた」と言つた。併も、其の晩飯を私が食はなかつた

事では上等兵が心配して

「飯を食はないと疲れるぞ」なんかと頻りに言つた。私はお可笑いながら此の上等兵却々親切だと思つた。

二日の演習も怎うやら無事……と云ふより他の者が行軍で疲れた体を運ぶより、前日樂に歩いて來た私の方が動作が敏活であつたので褒められたりして濟んだ。

其の翌朝我が聯隊は歸營の途に就いた、往くと同じく隊伍堂々と行軍した。併し、私は往きの時のやうな横着は爲なかつた。

兩國橋を渡つた時は全身綿の如に憊れ果て、氣が遠くなつたやうに思はれ、夢中で歩を運んで居た、すると突然道の脇から

「あら、兄さんがあんな顔で」と云ふ聲に偶と眼を遣ると私の家から分れた柳橋新榮家の抱妓が二人で私を指差して居た。私はたゞ笑つて見せたが、汗の上に塵の皮が被つて宛然黄粉のお萩のやうな顔を爲て居る私の顔を見た二人は驚きの眼を睜つて居た。

「その面ぢや兄さん臺無しだな」と上等兵に冷笑されたが、其の後私は此の二人に會つた時には

「でも兄さん感心だわネ。とても兵隊なんか勤まるまいと思つて居たけど矢張り男だわネ」と、賞賛に預つて嬉しかつた。

三等症

——恥と我慢と何方が辛い——

軍隊の病氣や負傷は輕微なものなら醫務室で診断され休養室で治療されるが、少し重いとなると直ちに衛戍病院へ連れて行かれる。其の病傷も其の原因に依つて一二三と三等に分たれて取扱ひが異なる所は飽くまでも軍隊式である。行軍中に卒倒したとか器械体操で負傷したとか云へば一等症と名が付いてお客扱ひで大事にして呉れる普通の病氣不慮の負傷は二等症で三等症となると主一花柳病で其の他は故意に行つた病傷で、其の取扱ひの酷なことは病人を取扱ふやうには思はれない。

私は戸山原で散兵の演習中、夢中になつて草の中へ轉がると運惡

く其所に硝子瓶の破片があつた爲め、右の掌を一寸ばかり切つて終つた。それで私は一週間の練兵休、勤務も爲ないで遊び暮した事がある。勿論一等症であつた事は言ふ迄もない。

私が古兵になつた三月の事である。或る寒い朝中隊内を周番上等兵が

「服装は其の儘營庭へ集れツ」と呶鳴つて歩いた。中隊の兵卒は直ちに集合したすると中隊の入口から中隊の將校中一番頑猛な原田少尉と第三班の班長が一人の初年兵を連れて出て來た。そして少尉は直ちに號令を掛けて中隊の兵を四角に列らべて、其の中へ三人は入つた。見れば少尉に連れて來られた初年兵の顔色は蒼白になつて少

し跛を引いて居る。

此の初年兵は何か悪い事を爲たに相違ないと我々は直ぐに思つた。果せる哉 少尉は其の初年兵に向つて

「戸田ッお前の洋袴も袴下も下へ下げろツ」

と恐い眼で命令した。戸田は急ち泣きさうな顔になつた。そして

「戸田が悪うありました」と頻りに詫びて居るが少尉は承知しない

「不可ん、下セツ」と呶鳴り付けた。

「お前下さないのかツ」と班長も云ふ。

戸田は不性無性、極り悪さうに洋袴も袴下も膝の下まで捲り下して顛へて居る、少尉は容赦なく戸田に「オイ氣を付けいだ、不動の姿

勢だツ」と云ふ、戸田も仕方がない観念して不動の姿勢を取ると驚くべし戸田の股間から梅干のやうに腫れ上つて居るのが現れ出た。少尉は直ぐに我々に向つて「休め」と號令を掛けた。戸田の此の様子を眺めた我々の間からは笑聲が起つて何れも嘲笑と侮蔑の眸を戸田の股間に向けた。少尉は兵卒達を見廻して

「皆は此の兵の、これは何だか知つて居るか？」と其の腫物を指先でグイと押した。

戸田は思はず飛び上つて

「痛た たつたツ少尉殿戸田が悪うありましたたつたツ」と泣聲を上げた、笑聲は又起つた。

「知つて居るものは手を舉げい」と來た。

兵隊達は一齊に手を舉げた。

「玉村ツこれは何だツ」と私が指し入れる。

私は安物なんか買ふからだと腹の中で。

「はいッ横弦であります」と立派に申上げると少尉は直ぐに

「怎うすると恁麼ものが出来るか？知つて居る者は手を舉げい」

又一同の手は一齊に上る

「鈴木ツ」

「はいッ不潔な場所へ行つて遊興するからでありますッ」

「爾う云ふ所へ行つて遊興して好いと思ふ者は手を舉げい」

誰も手を擧げるものはない

「悪いと思ふ者は？」

手が一齊に上る、少尉は尙も戸田を辱しめる必要があると思つたか

「こんな物を作つて」と又も戸田の股倉を力を入れて押すと戸田は

泣聲を振り絞つて

「痛たツたツ少尉殿勘忍して下さい、痛たツた、た、戸田が悪うあ

りました」と言ふのも關はず

「恥か恥でないか、吉田言つて見いッ」と最も他人が恚麼目に會う

のを喜ぶやうな吉田を指すと吉田の奴め占めたとばかり

「はいッ軍紀風紀を紊し、軍人の態面を毀け、君に不忠、親に不

孝な所業で軍人ばかりでなく人として大恥であります」と

言ひも言つたり 不忠不孝まで云つた。之れで少尉は横弦に對する

質問を止めて、戸田を何故に恚麼に辱しめたかに就て話した。少尉

の説明する所に依ると戸田は正直に白状せず班長を誤魔化して診斷

を受けやうとしたのみならず少尉に横弦である事を發見されたに關

らず斷じて不潔な場所へ出入した事はないと言ひ張つて飽くで

少尉を盲目に爲やうとしたのだと云ふ。戸田が早く有態に白狀して

了へば之れ程の辱めを受けないでも濟んだのであつたが――。

兎に角我々は其の朝思ひ掛けない余興を見た譯だ。

* * * * *

其の年の秋の事である、私の班の初年兵で山崎と云ふ魚河岸から来た男と或る晩のこと酒保で會つた山崎は突然私に「玉村さん緒寸とばかりに、私を角の方へ連れて行つた。」

「何だい更たまつて？」と私が聞くと、山崎は急に聲を低くして

「實はね私は大變な事になつちやつたんですがねエ」と、平時私は初年兵の面倒を見て遣るので其所を見込んで私に何とかならないだらうかと云ふ相談だ。

「大變つて何だい？」と云へば山崎は手を股倉へ持つて行つて

「これなんです」と腫上つた眞似をした。

「仕様がねいな、何時頃からだい？」

「既う一週間ばかり前からですが、既う我慢にも痛くつてね」

「それで練兵して居たのか？」

「えい、踏み切つて終うと思つて」と

山崎は案外度胸の好い事を言ぶが、私は呆れざるを得ない

「亂暴だな、止せよ、そんな事は、診断受けて切つて貰へよ」と言はずには居られない

「でも、戸田の様な目に會つちやね……それで無くとも後が五月蠅いのでね——」と

山崎は全く悲觀しながら診断受ける位なら相談はしないと云ふ顔があり／＼と見える

「と云つて怎うする事も出来やしなないぢやないか……それとも明日外出した時、町の醫者で切解して来るか？それでも之ればかりは入院しないと不可ないからな」

と、私は色々考へて遣つたが、好い考へは浮ばなかつた。

「それがです、私も明日外出して切つて来やうと思つてますが明日は生憎勤務が當つて居るので外出も出来ないんです」と山崎は萎れて終ふ、私は可愛相になつた

「安物なんか買ふからさ、それぢや乃公も外出したいんだが、班長に何とか言つて代つて遣らう」と云つたが「でも、お前明日切りは切つても演習も勤務も出来や爲ないぢやないか、後を怎うする

い？」と云へば山崎は決心したやうに、

「だつて、今まで我慢したんですもの、我慢出来るまで行つて見ませう」と云ふ。

私は其れ以上の親切を盡してやる余地がないので山崎と二人班長室へ行つた、山崎は跛を引いて居る、併し、人が来ると決して跛を引かない、其の我慢強さ、——道に苦しさうだが。

班長室へ行つた二人は山崎の祖婆の一週期だから是非外出させて呉れ、其の代りには私になると云ふので新兵の代りを古兵がしてやるなどは無い事だが班長は私の心意氣に感じて山崎を外出させる事にした。

私は其の日曜を風紀衛兵所で暮した。山崎は營門を出ると俾で走つた。

其の日の午后三時頃恰度私が營門の歩哨に立て居るのを見込んで山崎は歸つて來た、そして四方へ氣を配りながら私の傍へ寄つて來るかと思ふと急に衣囊から紙包を二ツ出して私に預かつて呉れと頼む、それは衛兵所で調べられる虞れがあるからだ、私は萬事承知で其れを受取ると袴下の下から氣の付かれないやうに洋袴の中へ入て終つた。山崎は安心したやうに歩取も亂さず無事に班へ歸つた。其の晩私が勤務を終つて酒保で山崎に會うと、痛いながらに多少元氣

付いて

「到々やつちまいました」と横弦を切り取る手付を爲た。

「後を氣を付ける」と私は充分注意した。

山崎が先刻私に渡したのは、ガーゼに繻帶に消毒用の昇汞水の小瓶であつた、

彼は其の後は便所へ入つては、切解した傷口の手入を爲た、私も一緒に便所へ入つて手傳つて遣つた事は何度だつたか知れない、彼は香のするのを虞れて沃土ホルムを用ひず、水筒へ昇汞を割つて、それで時々傷口を洗つたゞけで、練兵も演習も平素と變らず勤めて居た、それでも道に激しい散兵では、彼は死の苦しみのやうに齒を

喰絞つて居た。戦友の誰も気が付かない程彼れは苦しんだ。其の苦しさの總てを知つて居た私は他人事ながら、「よく我慢が出来た」と思つた。夜は發熱して苦しがつて居る彼れを見た時私は幾度か彼れに醫務室へ行けと勧めたが彼れは其の度毎に「今まで我慢したのだから」と云つて聞かなかつた。彼れは勿論風呂へは入らなかつた。彼れが食事を取りに行く時なぞ私は幾度も代つて遣つた、彼れは其の度に手を合せんばかりに感謝を捧げた。

彼れは二週間ばかりの間に、げつそり瘦せたが運の好い彼れは何時か痛みも薄らいで傷口には薄い皮が出来た。

「山崎此の頃腰付が變だ」と云はれ始めた時は、彼の傷口が大分癒

つて發熱もしないやうになつてからの事だつた。

斯くして彼は醫務室に行かずに全快して了つた。併し、彼は醫務室へ行つた方が余程樂だつたと常に言つて居た。

彼の此の横弦になつた事實が中隊中に知れ渡つたのは私は除隊して終つて彼が古兵になつてからの事だつたと云ふ。彼れは一年も後になつて自慢話として班長にも將校にも話したのであつた。誰も其の我武者羅な荒療治を堪へた彼の我慢強さには呆れたさうだ。併し、事實を見て居た私の呆れ方は其れ以上であつた事は言ふ迄もない。

山崎は今では一等卒である、日曜には時々私の家を訪問する、そして聯隊の其の後の容仔などを聞かして呉れる、そして彼は何時で

も私の顔を見る度に「何時か御恩報じは必乎する」と云つて居る。彼も江戸兒である。彼が軍隊を出てからもあの我慢を以て押し通したら随分猛烈な事が出来るだらうと私は思つて居る——。

機動演習の一夜

——これも前世からの約束でせう——

機動演習の第一夜である。時は晩秋の夜は寒い。

「今晚は……」と既う天戸を下した千葉縣下津田沼町在方の百姓家へ辿り付いたのは私が右翼で初年兵が三人と古兵が私と二人都合五人であつた、其の家は豫て聯隊本部から指定された宿舎であつたの

だ。

「お母あん、兵隊さんが来たよオ」と暗い上柵に居た腕白が嘸鳴つた。機動演習がある度に宿舎に當てられるので此の百姓家、兵隊さんを宿める事は馴れて居る

「あら、さうかい」で出て来たのは三十の坂は越したらうが百姓家には不相應とも見える大年増の女房である。双子であるが今夜は私達と云ふお客がある爲めか着換へたらしい身装で——

「おや、居被やいまし、切角お待ちして居りました。先程隊の方がら人がお見えで、今夜五人頼むからとの事でムいしましたが、何分御覽の通り、汚ない所ですが、宅では毎時の事でムいますからつてね

まアお受け爲たんですが、さア怎うぞ」と女房君獨りで喋舌つて居る。

「いや、御厄介様です、怎う五人何分お願ひします。」と云へば

「え、何のお關ひはしませんか、さア、何卒、此方へ」と愛想が馬鹿に好い、五人が柩へ腰を下して巻脚絆を解いて居る所へ、此の家の主人らしい四十男の逞しい男盛りの朴訥らしいのが出て来て、會釋を爲ながら「大變ですなア、私なんかも覺へがあるが……」と云ふ、奴さんの言ふ事を聞けば主人公は私達の先輩だ

日が暮れてから間がある、七時半にも成らう、五人が五人共に腹はペコ〜の上に、これから十二三町も隔つた蓮妙寺と云ふお寺と

で炊事班の炊出し御飯を取りに行かねばならない、怎麼役目は初年兵に言ひ付けければ好い事だが、初年兵だつて同じ人間で同じに腹ベコた、殊に馴れない身体は尙疲れが辛からう、初年兵に親切だと云ふ評判を取つた私は今しても初年兵思ひの氣が出る、殊に此の評判に對しても初年兵を然うは扱き使ひ度くない。半分解いた巻脚絆を又捲き直した私は「おい之れから飯を取りに行かなきゃならないが、乃公が一馳り行つて来てやるから待つて居ろ」怎麼古兵が何所にあらう、日本國中軍隊多しと雖も恐らく乃公一人だと……私は初年兵を撫つて遣るのが得意で怎う言ひ出すと、初年兵達何で黙つて居られやう。「玉村さん、好うムます、そんな馬鹿な事が、私達が行きますから」

と口々に言ふ。

三六八

「いゝよ、お前達は馴れてないのだから、それに初年兵が行くと却々呉れないしするから、乃公が行きやア直ぐだ……」と私が再び戶外へ出やうとするのを先刻から見て居た、此の主人公周章たやうに私を喚び止めて、

「もし、貴君、飯なら取りに行かないでも家で今日は澤山炊いて置いたから……後で、腹が出来たら散歩がてらに言ひ譯だけでも取れば好いちやないか」と言ふ。兵隊の事なら萬事承知だと云ふ面持ちで——
「でも、爾う言ふ譯には行きませんでしやう。何直きですから……」
と言へば、初年兵達は又、

「玉村さん、私が行きますと」出やうすると主人は折返して。

「好いて事よ、君等の事は萬事知つて居るんだから、私はこれでも一十八年兵で矢張り苦勞は爲たんだから……」と云へば、女房は傍から「宅では兵隊の方がお出になれば、何時でも爾うなんですから……」と二人して余り親切にして呉れるので、此の上断るのは氣の毒でもあゝるし折角炊いて置いた飯を食はないと云ふのも先の親切を無にする譯だから、それではと云ふので五人は上り込んだ。

古い家ながら綺麗に掃除された茶の間の様仔で見ると萬更水吞百姓では無いらしい、黒柿の火鉢に茶箆筒や鏡臺にも清掃きを掛けて居るらしい、壁に廣告の唇が貼つてあつて、楣間には鉄舟書が例の字を躍

らしてある。其所へ兎に角車座になると女房は甲斐々々しく手焙に火を呉れる茶を入れて呉れる。至れり盡せりの歡待に私等はたい恐縮するばかり。丹前姿の主人公は火鉢の前に坐すわると一廻り同情ある眼に私達を眺めて。

「あア、樂に爲たまへ、怎う寒くなつて來ちや火が好いね」と友達にでも口を利くやうに言つて。

「怎う爲ますね、先へ飯を食えますか、それとも風呂へ入るかね、怎うせ何にもお關ひはないんだけれど」と云ふ、私達は愈恐縮、これでは眞劍のお客様扱かいた。

「怎うします、お肚は減つてるんだから、先へお飯を食べちやア」と

女房を顧みれば女房はまた、

「お風呂から上つて好い氣持になつてから悠然食がりますか？」と云ふ、私達は互に顔を見合せて居る、意外の歡待に驚きながら——私達は怎う言ふ家では却つて遠慮すると氣持を悪くするから無邪氣に萬事世話を爲て貰つた方が好いと突嗟に思つたので——それに例の茶目氣もあつて。

「あ、ア」と、きも疲れて腹が減り切つたと云ふ態度をして「お風呂の中で御飯が食べたい」と獨言のやうに言ふと、主人も女房も戰友達も一度に喚と笑ひ轉た。主人は尤もだと云はぬばかりに。

「さうだよ、あの演習を爲て來ると、爾う思ふよ全くだ、全くだ」獨

り首肯うなづいて、兒共こどものやうに喜んで居る。此この笑わらひが因もととなつて、お互たがひに打ち解とけて、それでは、お風呂ふろを先さきへ頂いたかうと云いふので……其所そこは私わたくしが右翼おかしらのお影かげで初年兵達しよんべいたちが、

「玉村たまむらさん、お先さきへ」と云いはれて私わたくしが一番先はんさきに、これも古兵こべいの今井いまのと二人ふたりで裏口うらぐちの風呂場ふろば……と云いつても、怎どうせ田舎いなかの風呂ふろだ、五右衛門うゑもん風呂ふろでないのがせめてもと思おもふ位くらゐだが、女房にようぼうが湯加減ゆかへんにまで氣きを配くつて呉くれれるのが堪たまらなく嬉うれしい……

澹々うつくと立つ湯氣ゆげを顔かほに受うけながら注なぐした湯ゆに憊つかれた全身ぜんしんを浸ひたすと快こころよい疲勞ひろうは五肢しごを廻めぐつて何なんとも言いへぬ快こころよさである。……湯槽ゆねの枠わくに後頭うしろあたまを乗のせて瞑目めいもくして居ゐると種々しゆくな思おもひは浮うかぶ——今日こんにちの演習えんしゆの光

景けいは瞑つつた眸めに幻影げんえいとなつて現あらはれる、此この家の歡待くわんたい振びりを思おもふと有あり難がたさが泌しみ々く胸むねに込こみ上あげて來くる。

長湯ながゆは後あきの障さまげである、急いそぎ飛とび出だし、着換きかへの新あたらしい襯衣しやつを來換きかへへると、これは又また、親切しんせつな風呂場ふろばを上あがった所ところに木綿もめんではあるが、丹前たんぜんが五枚ごまい置いてあつて……そこで始はじめて見みた此この家の老婆らうばが顔かほを出だして今いま私わたくしが軍服ぐんぷくを着きやうとするのを見みて。

「之これを着きなさいよ、服ふくは窮屈きうくつぢやげに」と無理むりにも着きせ度たいやうである、私わたくしは遠慮えんりよも出で來きず、其その儘まま丹前たんぜん着き込んで茶ちやの間まに戻もどり、入れ代かへりに初年私達しよんべいたちは風呂場ふろばへ行いく——其その姿すがたが裏うらへ消きえるのを見みて居ゐた主人あまじは、やを私わたくしに向むかつて。

「貴君は偉い、本到に偉い、初年兵に彼様親切には却々出来ないもんだ」と素敵なお褒の言葉、様仔で聞けば、初年兵達が主人に私の陰徳をならべ立てたらしい。私は素敵に嬉しい……愈々可愛がつて遣りませう。

一同が風呂から出るか出ない間に、これはまた、前から用意が爲てあつたと見えて、大きな卓臺が夫婦の手で次の間から運び出されると其の上には田舎ながらに御馳走が山のやう……煮た物、酢の物、それに驚くべし、刺身があつて、畑徳利が三本整列して居る始末である。私も今井も

「これは、之れは、」と言はざるを得ない。風呂から出て来た初年兵達

も此の有様に形容の出来ない喜び顔……その喜び顔を眺める夫婦と老婆の喜び顔！ 私の筆拙にして此の時の光景と我々の心の喜びを充分に知る事は出来まいが、想像して呉れ給へ。

私は、御承知の通り藝妓家の倅である。刺身に徳利などは左程に喜ばなくとも好いが、憊うした場合に、憊うした待遇には、何と説明して好いか解らないが、私はその時程嬉しいと思つた事はないと言ひます。

風呂上りの氣持ち、湯で上氣した頬を、竹ボヤ洋燈に照されて、五人の私達は丹前姿で、食慾を満たすに充分なる種々の御馳走の前に坐つた時の嬉しさ——。腕白は先へ寝かされたと見える癩はつく、箸

は口へ飛ぶ、盃は廻る、話しははづむ、主人が其の昔の兵營生活を話し出したのが機會に、日露戦争での功話、聞けば、主人は佐倉聯隊で日露の役では、自分は遼陽から奉天へ、弟は第七師團旭川から旅順へ、兄も弟も功七級の金鵄勳章……だが弟は天晴二〇三高地で名譽の戦死したと云ふ、話に馴れて居ると見えて、順序よく二人の功話にも興は盡きず、女房も老婆も、傍から之れに補足したり、合槌を打つたり、果ては自分のと弟のと二個の金鵄勳章と白色銅葉章とは持ち出され、私等五人の手から手を渡つて、眺められる、主人も女房も老婆も得意と喜びの鼻を蠢めかす、それから随いで私達はお互の身の上ばなし、將永くお互にお交際を願ひますから、又話は戻つて兵

營話になつた時は、いづれも減腹の酔は廻つて玉山將さに崩れん有様である。

此の家の主人は新田賢吉と云つて、通ひの小作人が七八人も居る、此の邊では中位上の百姓だとの事、細君は、主人が先刻の話で、「木更津に出た時分」と云ふ事があつたから恐らく藝妓でしもあつたのたらうとは、私は商賣柄見逃がさない、先刻の腕白が出来たので女房に直つたとは知れた話であらう。それに爲ても其の甲斐々々しさ、百姓家に似ず萬事を綺麗事に手取早く、お世辭は好し、老婆には盡すし、亭主も姑も幸だと思ふ。

酔つたが上で私の身分柄、藝妓家の作と知れて、女房とも話が合

ふ。それでは隅に置けないが始めては、主人が自慢の一口義太夫に當てられたお返しには、私が聞き覚えの清元を謠へば今井が磯節を唄ふ始末、炊事班の事も忘れて終へば、點呼の見廻りは主人が要領で風呂の間に無事に返して呉れた。十二時近くまで領んで遊んで居る間に、老婆はお先へ寝ると云ふので寝る前の風呂へ立つた。程なく女房は、老婆の世話に立つて行つた。

* * * * *

不幸は決して人間に前觸を爲さない——と云ふ事を前提して置いて、私達が無上の歡待に喜んで居た、其の次の物語りませう。其の物語は

此の家の女房が裏の風呂場から空然金切聲を上げて、

「誰か来て下さい」と叫んだ事に依つて始まるのである。

「をやッ」と、今し飲み疲れた主人は顔色を變へて立ち上つた、續いて私も、他の者も、……次ぎの瞬間に我々は主人を先に立て、裏の風呂場へ走つたのである。

女房の絶叫は老婆が風呂の中で卒倒して居た爲めであつた。併も、湯の中へ頭を突込んだまゝである、……既う、縛れて居る様仔だ、主人と女房と我々も手傳つて老婆を一問へ昇ぎ込んだ、盃盤浪籍たる酒宴の跡は、淋しく取り残され、歌謠笑聲の酒興の後には、愁雲が蔽ふた、無人の家には醫者まで走るものは主人の他より他に無い、此の場

合一時たりとも世話になつた私達は安閑としては居られるものでない。醫者へと主人が言ふのを受けて、初年兵の諸田は、「私が行つて来ませうと申出る、私が「うん、爾うだ、御苦勞だがお前行つて来て呉れ」と言へば主人は「君達を使つて怎うするもんですか、私が行つて来ますから……それに歩哨にでも合つたら面倒ですから」と自分が出蒐けやうとする。

そして留守を頼みますと早や戸口へ出やうとするのを諸田は追絶つて、「大丈夫ですよ？ 醫者は何所です私が行きます」で私達が異口同音に言ふので、主人も、

「それぢや、誠に濟みませんが」と云つて、此の家から二十町近くも

ある津田沼町の醫者の家を教へた、諸田は委細承知で、尻を絡ると、町へ向けて一散に走つた。

老婆の体軀は刻一刻と冷えて行く、勿論唇の色は紫に變じて死相は顔に現れて来る。杞憂と哀愁の時刻は經つて行く。主人は私達に、「お憚れでしやうからお休み下さい」と頻りに言ふが怎うした場合寢られるものではない、一時間經ち、二時間經つたが醫者も来なければ諸田も歸つて来ない、

「怎うしたんだらう」と我々の口から漏れ出した時分、若い醫者が来た、田舎らしくない醫者は、主人や女房が心配して居る間に、至細に診察したが、既に老婆の魂は天外に飛んで終つた事を報告するに過ぎ

なかつた。

「誠に御氣の毒ですが」と醫者は氣の毒さうに云つた。

それに付けても諸田は歸つて來なかつた、我々は主人には氣の毒であり、諸田にも氣掛りでならなかつた。

到々、老婆は北枕に寝かされた、そして屏風は倒に其の枕元に引き廻された、机の上には香が焼かれた、煙は累々と立昇つて、女房は涙に濡れた眼を瞬きながら、喪の仕度を始めた、親一人子一人の主人は臉を膨らせ聲を曇らせて居る、我々は其の夜は寢ずに通夜する事にしたが。諸田が歸らないので誰か迎ひに行く事になつた。主人は頻りに我々に通夜の不要を迫つたが――。

一夜泊りの兵隊さんに通夜をされる婆さんも、又通夜する我々も妙な運命の廻り合せに主人は「之れも何かの御縁でしやう」と言つた。

午前三時になつたが諸田は歸つて來なかつた。我々の杞憂は結局諸田が歩哨に捕まつて檢べられて居るのだらうと云ふ事になつたので、私は更ためて、右の次第を中隊本部まで報告がてら諸田を迎へに行く事にした。

私は初年兵の一人を連れて出掛ける事にした。それで二人は丹前を軍服に着換へ、軍装を整へると、夜中の三時を十町も隔つた本部へ出蒐た、それは津田沼町へ行く一筋道であつた。蓮妙寺が本部となつて中隊長を始め中隊付將校も自分の班長も其所に宿つて居たのであつた

今し蓮妙寺に來て見ると歩哨が立つて居る、先づ班長に急に面會する
 必要のある旨を歩哨に告げて、臨時の風紀衛兵所へ行つた、すると其
 所に諸田が丹前姿の儘伍長の衛兵司令と何やら話して居た、自分は噫
 と安心して委細を衛兵司令に話した、そして班長に面會したい事を申
 込むと夜中ではあるが、班長を起して呉れる事になつた、私達三人は
 寺の本堂の裏小座敷で班長に會へた、そして其の夜、自分達が歡待を
 受けた事から老婆の頓死の事まで話して暗に演習を休まして呉れと云
 ふ意を漏した。そんな事に時間が経つて居る間に便所に起きたか運好
 くも中隊長が其所を通つて、私達の様仔を見て、
 「怎うしたのか？ 何だ？」と訊かれた、私が「宿舍に當てられまし

た老婆が頓死をしましたので」と云ふのを受けて中隊長は、
 「ふーん、怎うして？」と又訊ねた、私は其の夜 歡待された事は勿
 論、其の家の主人公が日露戦役の勇士である事から老婆の頓死の状況
 から通夜を爲て居る事から諸田を心配して探ねに來た事まで殘らず報
 告した、中隊長は其の不思議の廻合せを感じたものか、
 「ふう、爾うか、宜し、お前達は何かの因縁ぢやらう、好く世話を爲
 て遣れ……それぢやお前達は今夜寝ないのだな、それぢや演習は出來
 ん、明日、否、今日は休めツ」と物事に氣の付く中隊長は云つて呉れ
 た。軍隊で中隊長の言葉は鶴の一聲だ、私達は練兵休を貰つて其の儘
 其の家へ引返して來た。

家へ歸ると委細を話して、怎うせ休みだから「用があるなら爲て上げる」で、其の夜は通夜をしながら、遠くの親戚へ出す老婆死去の知らせの手紙を書いて遣るから、代り代り香を立てるやら、主人夫婦は「若し貴君方が居なかつたら怎する事も出来なかつたが」と言ふ、私達は「私達が来なければ」と云つて居た――。

偕て諸田の話を聞けば、行きには誰にも料せられもせず、歸りになつて町から出て三町も来ると風紀衛兵の巡察に合つて、

「何所へ行つたかの？」と聞かれたので、一什始終を話したが、衛兵の巡察は、それを信用しなかつた、軍隊の襦衣の上に丹前を着て殊に先刻馳走になつた酒氣は未だ醒めず殊に町から歸つて来たので、巡察

は適確、抜け遊びの歸りだとのみ思ひ込んで終つたのであつた、種々は辯解したが、兎に角朝になれば解るからと云つて衛兵所へ引張り込まれ、朝まで此所に居ると云ふ宣告を受けた所へ私達が迎へに行つたのであつた。

夜が明けると近所の親戚や知合へは私達が知らせに行つて遣つた、それで人々は集まつて来た、私達は来る人々に盛んに禮を言はれた。そして奥の間へ入て寝た。

機動演習が済むと中隊長から宿舎に宛てられた家々へ禮状を出した。其の中に此の家へは特に悔みと私達を歡待して呉れた事に就ての

禮狀を出して呉れた。

彼からも手紙が来た、そして中隊長の手紙は永く記念する爲めに保存して置くと云つて来た、中隊長へは私が初年兵を撫ると云ふ事を、拙ない文言ながら細々と書き送つて来た、中隊長は其の手紙を特に私に見せて呉れた。

私が要領を使ひながらも又巡察なぞに悪い所は見られても軍服の右腕に山形の章を付けて、精勤の章を得たのは、怎うした事で中隊長から好い目を付けられて居たのが第一の理由だったと今に私は思つて居る。

借ても、此の新田賢吉君、今は怎うして居ることやら、あの愛想の

好いお女房さんは相變らずかしら、私は此の原稿が本になつたら、それを土産に訪ねて、見ませう。

一年志願兵

——要領が宜いやら悪いやら——

同じ壯丁で入營した身分ではあるが、肩書と富と境遇で、同じ日附で同じ班に起臥する身でも志願兵と普通兵とちや待遇こそ同じであれ何處か氣樂な點がある。私も恁麼事なら中學でも卒業してをけば宜かつたがと、今更後悔しても後の祭だ。だが志願兵なんてカラ意氣地のないものサ、行軍すりや落伍するのは志願兵と相場が定つてゐる。學